

IV 本調査の記録

1. 調査の方法及び経過

福田町に所在する中山遺跡と小豆崎町に所在する正津遺跡は、ともに旧藩時代から畑として利用されている。このため降雨等による土砂の流失が著しく、安山岩の火砕泥流を深く耕作して耕土としたため、結果遺構の残存度が極めて低くなっていた。

このため本調査は範囲確認調査で新規に遺跡の存在を確認した中前後谷遺跡と、正津遺跡の遺構確認地点、中山遺跡の遺構確認地点を中心に実施した。

中前後谷遺跡は小豆崎溜池の西側に位置し、南に向かった細長い丘陵で水平距離約160m、比高約13mを測る。丘陵の中央部には南北走る農道が敷設され、1m強周辺より切り込んである。

中前後谷遺跡は調査対象範囲全体を世界測地系に基づき4×4mのグリッドに区切り、東西軸をA～U・南北軸を1～41に区分した(第23図)。

また、8×8mを大グリッドとし、土層観察用のベルトを設定した。

調査は8×8mの大グリッド(ブロック)単位に行い、遺物の取り上げは4×4mの小グリッド単位で行った。

調査区域は南北に長く、かつ高低差があるため範囲確認調査時に福田町649-2 S・649-2 Nが設定された地区を1区、同福田町649-1 S・649-1 Nが設定された地区を2区、その中間の地区を3区と設定し調査を行った。

遺物の取り上げは、包含層出土の遺物については基本的に4×4mグリッド単位で層位別に取り上げているが、1区の大グリッド12～23については範囲確認調査時に縄文土器が出土した649-2 Sトレンチの周囲であることと、地形が傾斜し標高が下がっており、遺物の出土が期待されたことから詳細なデータを得るためドット取り上げを行った。遺構出土の遺物は遺構単位で取り上げている。以下1～3区の概要を記すが、出土遺物に関しては後節において一括して取り上げる。

2. 調査組織

中山遺跡、正津遺跡及び範囲確認調査において確認された中前後谷遺跡の取扱いについて長崎県県央整備事務所との協議を行い、畑地帯総合整備事業の実施前段階において記録保存の調査を実施することとなった。

本調査は、平成20年度長崎県県央整備事務所の依頼を受けて、諫早市教育委員会が実施し、現地の調査は扇精光株式会社に委託して行うこととした。

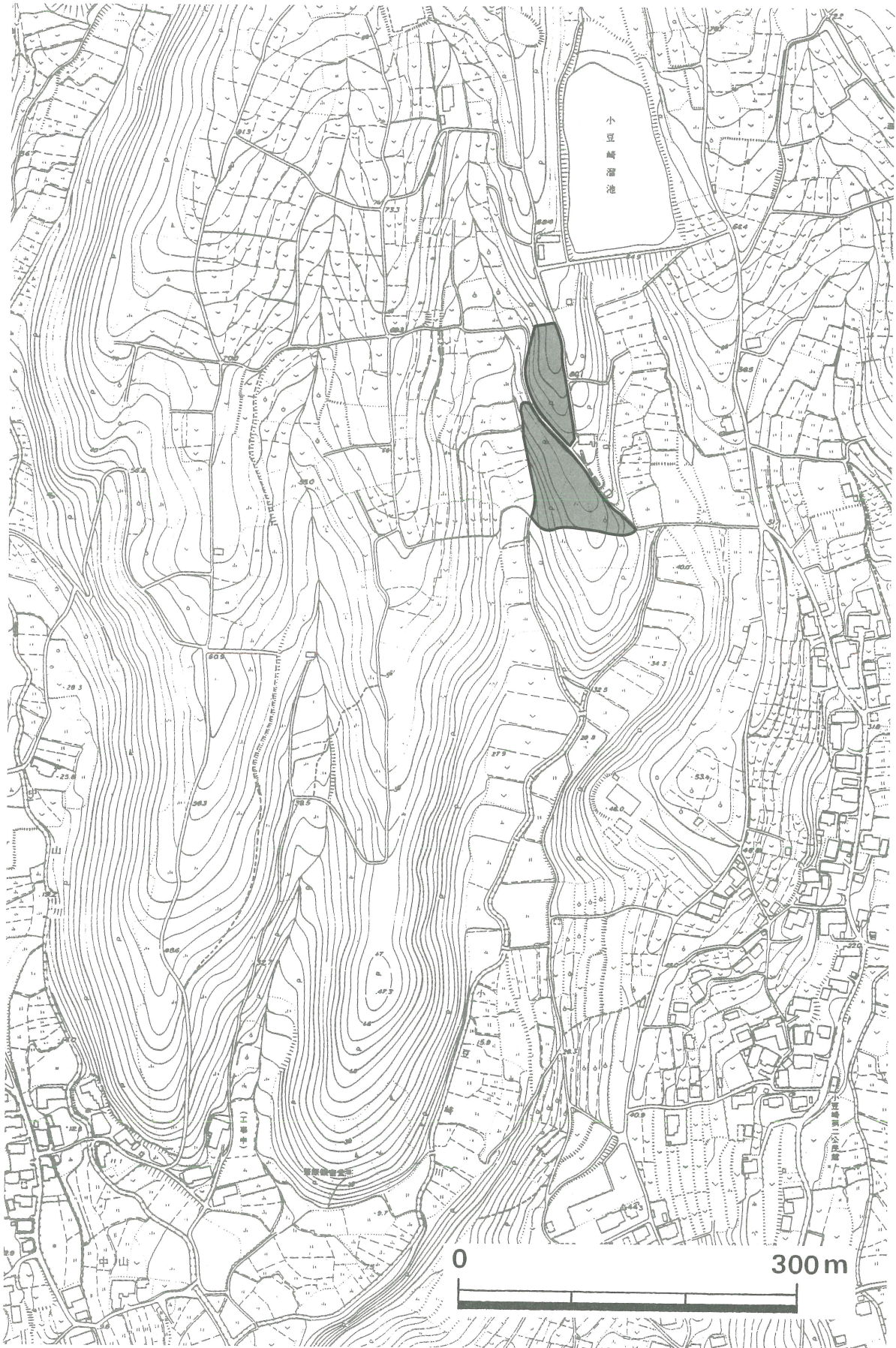
本調査の実施体制は、次のとおりである。

諫早市教育委員会

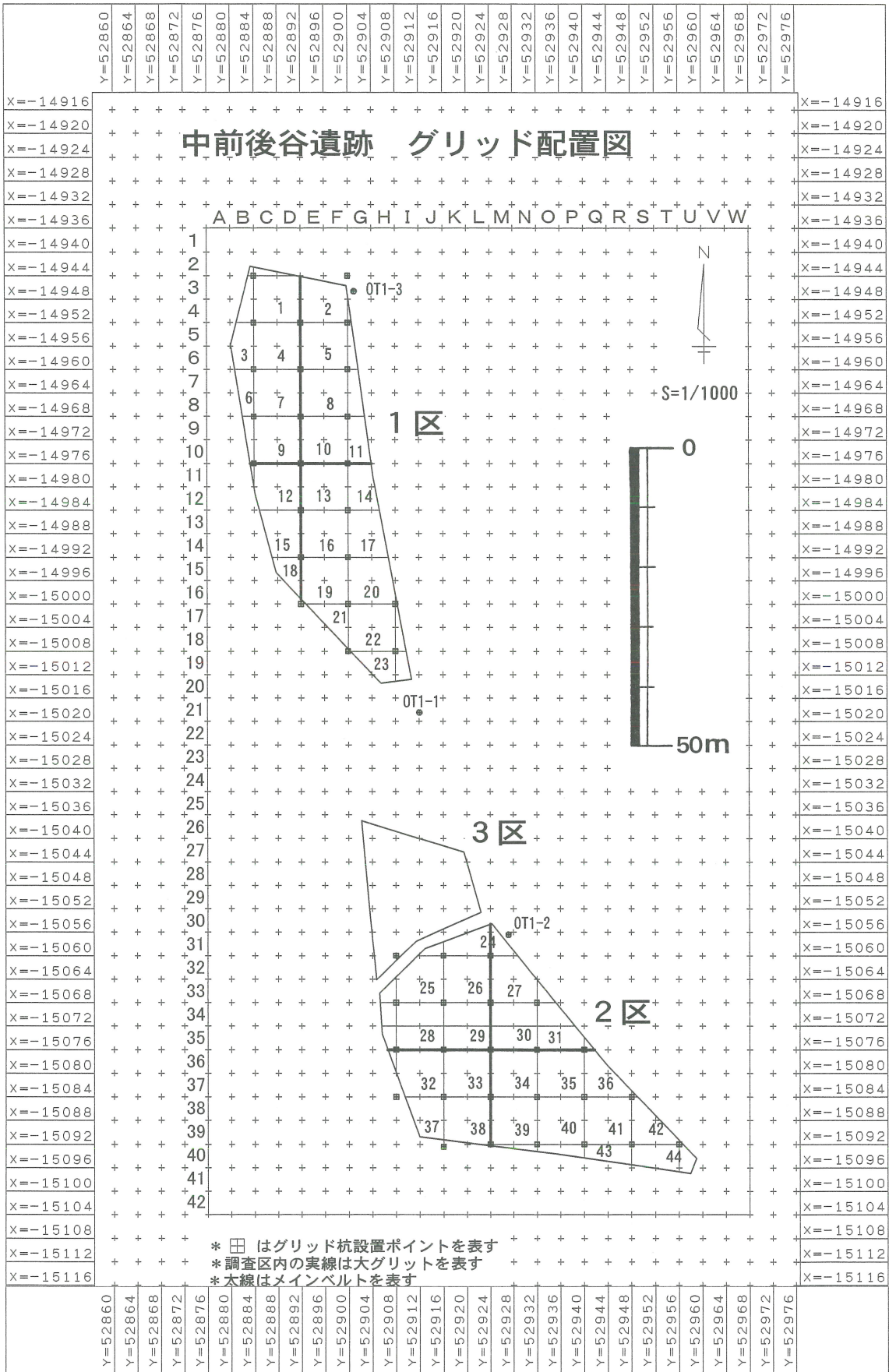
教 育 長 峰松 終止（調査総括）
教 育 次 長 平古場 豊
文 化 課 長 松本 玉記
参事兼課長補佐 船岡 秀海
主 任 石丸由紀子
文 化 課 参 事 秀島 貞康（調査担当）
事 務 職 員 竹中 哲朗（調査担当）
文 化 財 調 査 員 深川 由香（調査担当）

扇精光株式会社

現 場 代 理 人 池井 栄次
調 査 員 井立 尚
調 査 員 織田 健吾



第22図 中前後谷遺跡（アミ部）調査前地形図（S-1/5,000）



第23図 グリッド配置図 (S-1/1,000)

3. 1区の調査 (第25・26図)

1区は以前から山林であったところで、元禄期のものと思われる『郷図』にも山林として着色されている。

地形は標高62mから南側に徐々に高度を減させ、3区との境で56mを測る。

平成19年度に実施した範囲確認調査において福田町649-2-Sトレンチ (649番地2の南側に設定したトレンチ) トレンチの表土から「縄文時代晩期前半と思われる土器片」、同649-2-Nトレンチから「黒曜石の台形石器素材の折取り素材残滓剥片」が出土している。

このことから、遺物および遺構の確認を目的に649-2-Nトレンチ・649-2-Sトレンチが設定された地点一帯の1,647m²を1区として設定し調査を行った。

ー1) 土層概要 (括弧内は範囲確認調査における土層表記)

1層：暗褐色軟質土層 (=表土)

表土である。上層には腐葉土が堆積する。近現代の陶磁器に混じり黒曜石が出土する。

2層：暗赤褐色混礫土層 (=茶褐色砂質土でシルト質)

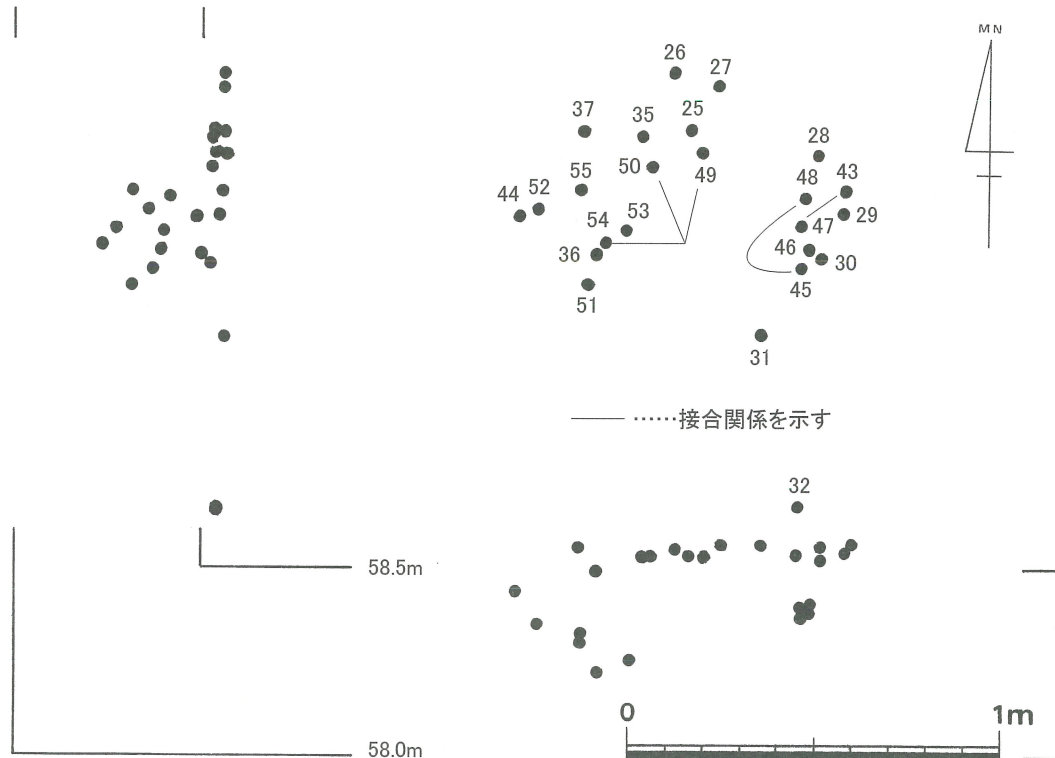
1区の主たる包含層である。層中から縄文時代早期・晩期の土器、黒曜石、石鏃が出土している。

3層：暗黄褐色混礫硬質土層 (=火砕泥流・地山)

4層 (岩盤) が風化した礫および土壌化した4層が堆積する。遺物は出土しない。

4層：黄褐色硬質土層

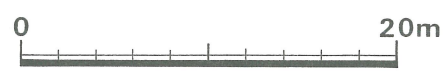
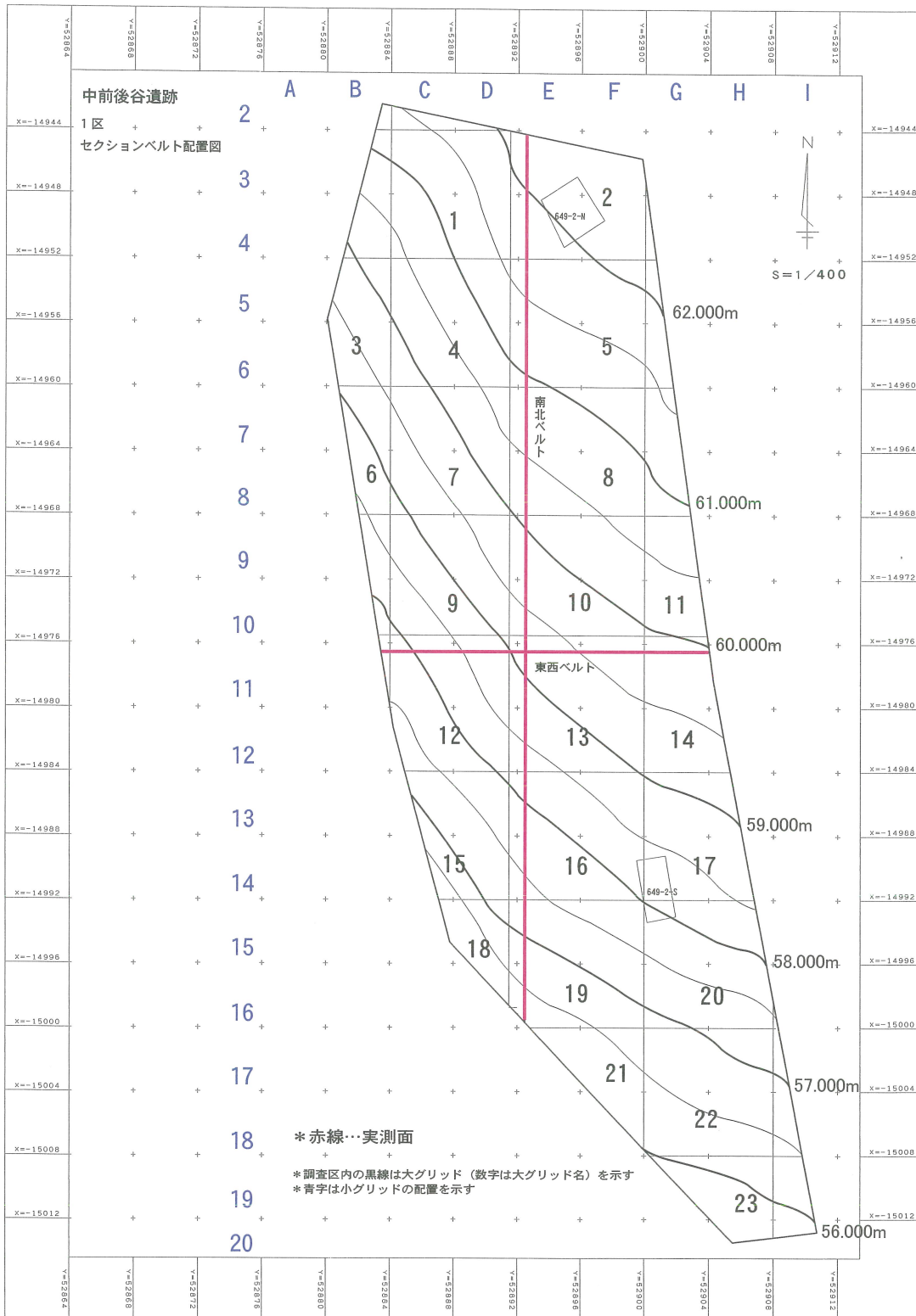
岩盤である。



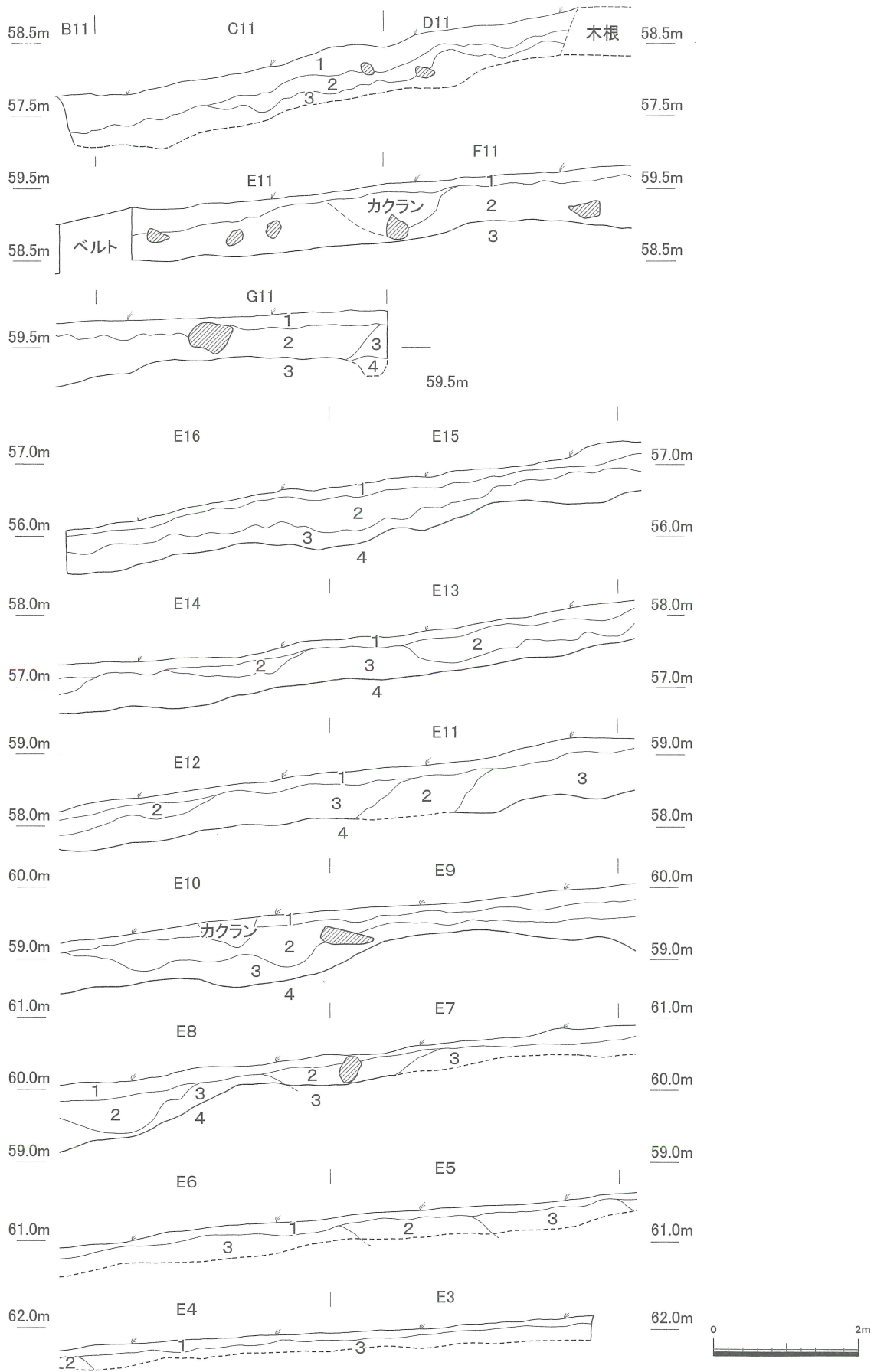
第24図 G・Hグリッド、ドット・マップ (S-1/20)

番号	区	地点	地点	層位	ob										an					計				
					f	uf	ch	石鏃	削器	搔器	石核	細石核	台形	挟入	f	石匙	削器	土器	陶磁器		砂岩	瓦	青磁	青花
1	1	23	23ブロック北バルト		1																			1
2	1	1	B3	1	1		2																	3
3	1	1	B4	1		1																		1
4	1	1	B4	2																			1	1
5	1	3	B5	2	1																			1
6	1	6	B8	2	1				1															2
7	1	1	C3	2			1	1																4
8	1	4	C6	2	1																			1
9	1	7	C7	2	1	1		1																4
10	1	9	D10	2	1		1																	4
11	1	18	D15	1																				1
12	1	1	D4	2	1																		1	2
13	1	9	D9	2			2																	2
14	1	2	E3	2	1			1																2
15	1	5	E5	2																				2
16	1	5	E6	1																				1
17	1	8	E8	2	2	1																		2
18	1	10	F10	2	3	2						1												4
19	1	2	F3	2	1																			14
20	1	5	F5	1	1																			1
21	1	5	F6	2	1		3																	2
22	1	5	F6	1	1		2																	5
23	1	8	F7	2	2	1	5	1																4
24	1	8	F7	1																				12
25	1	8	F8	2			1																	0
26	1	10	F9	2	1																			1
27	1	11	G10	2			1																	1
28	1	14	G11	2	2	1																		3
29	1	14	G12	2	9	1	3																	5
30	1	23	G19	1	2																			4
31	1	8	G8	2	1		1																	2
32	1	8	G8	1	2																			2
33	1	11	G9	2	2																			4
34	1	17	H13	1				1																5
35	1	1	東西バルト西側		2	2																		1
36	1	1	東西バルト東側																					4
37	1	1	南北バルト北側		1																			18
38	1	1		1	2	1																		1
39	1	20		1	1	1																		3
40	1	13		1	5	1																		4
41	1	9		1			2																	10
42	1	7		1	7	1																		4
43	1	13		1	2		3																	4
																								5
					57	16	29	2	4	1	7	0	1	0	12	1	53	3	1	0	0	0	0	188

第7表 1区出土遺物集計表



第25図 1区平面図 (S-1/400)



第26図 1区土層図 (S-1/80)

ー 2) ドット・マップ

C-11グリッドからI-17グリッドにかけて、2層において遺物の出土が見られたのでドット・マップにおいて取り上げることにした。

特にG・H-13グリッドにおいては接合状態を示す土器(第34図6)の集中部が見られた。土器の集中は1×0.4mほどの平面的分布と、40cmほどの垂直分布を示しており、埋甕が存在した可能性が高い。

4. 2区の調査(第27~29図)

2区はかつて畑が存在し後にミカン畑として利用されたとされる。

標高は53mから徐々に高度を遡減し、調査区端で48.5mを測る。

平成19年度に実施した範囲確認調査時に福田町649-1Nトレンチの表土から縄文時代晩期の所産とみられる「トロトロ石器」、同649-1Sトレンチの表土から「刻目突帯文土器」が出土している。

このことから、遺物および遺構の確認を目的として649-1Nトレンチ・649-1Sトレンチが設定された地点一帯の1,620m²を2区として設定し調査を行った。

ー 1) 土層概要(括弧内は試掘調査における土層表記)

1層: 淡黒褐色土層(=腐葉土)

表土である。上層に腐葉土が堆積する。中近世~近現代の陶磁器・黒曜石・石鏃・縄文土器が出土する。畑として使用していたころの耕作土と思われる。

2層: 赤褐色混礫土層(=赤褐色土)

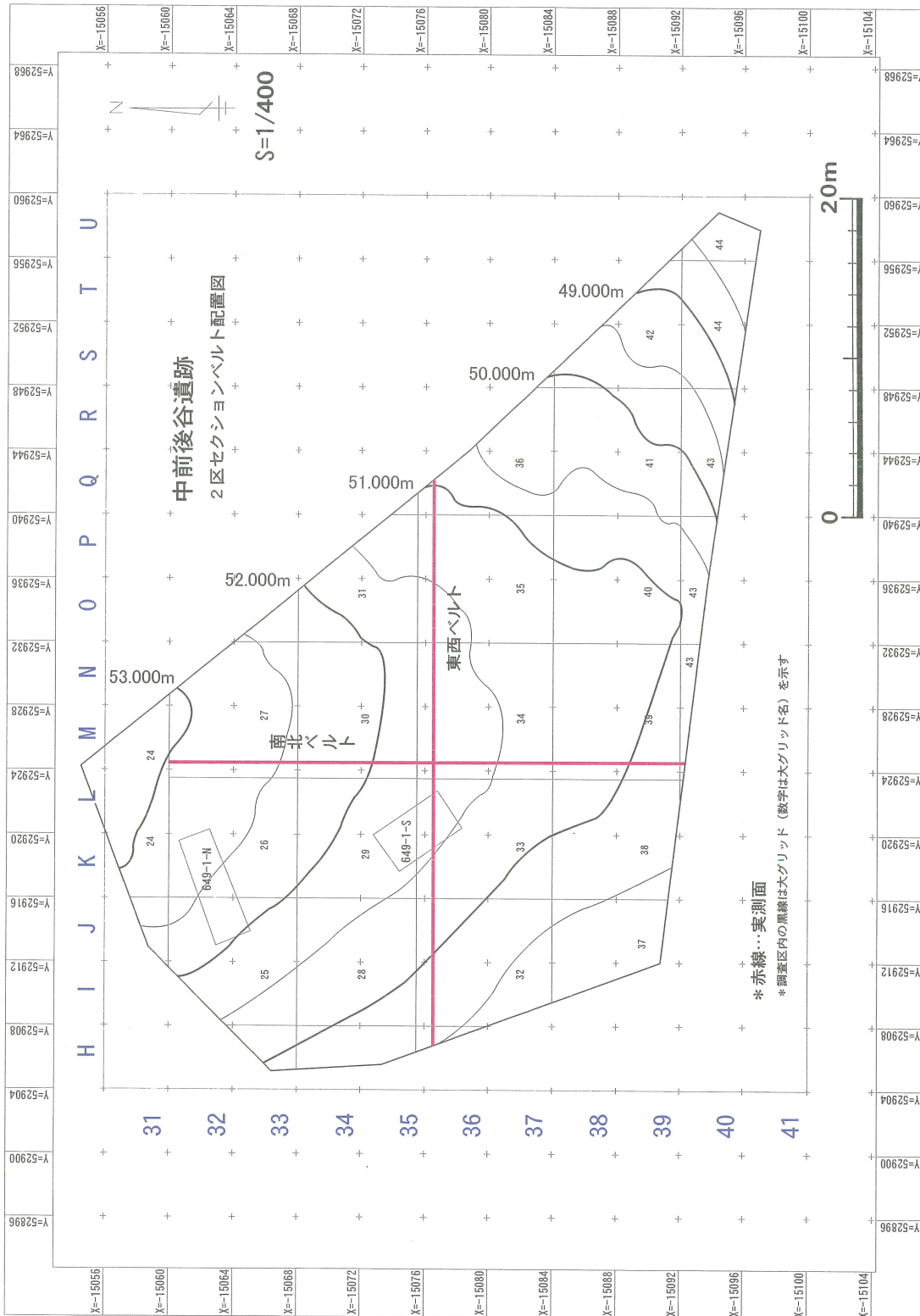
2区の主たる包含層である。層中から縄文時代早期・晩期の土器、黒曜石、石鏃が出土している。

3層: 暗茶褐色混礫硬質層(=どんく盤破碎土)

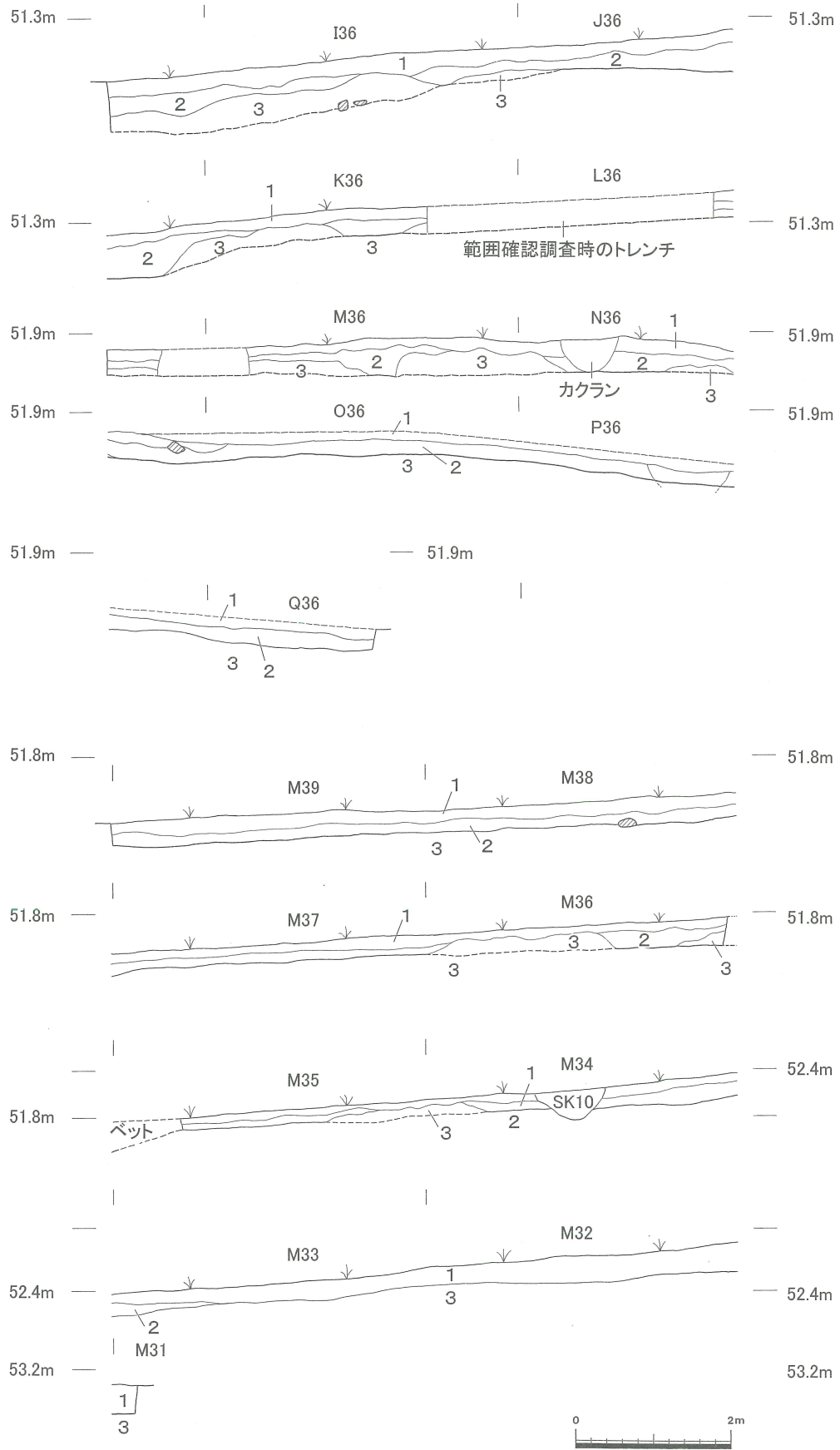
岩盤が風化した礫・土壌化した岩盤が堆積する。岩盤の漸移的な層と考えられる。遺物は出土しない。

ー 2) 遺構

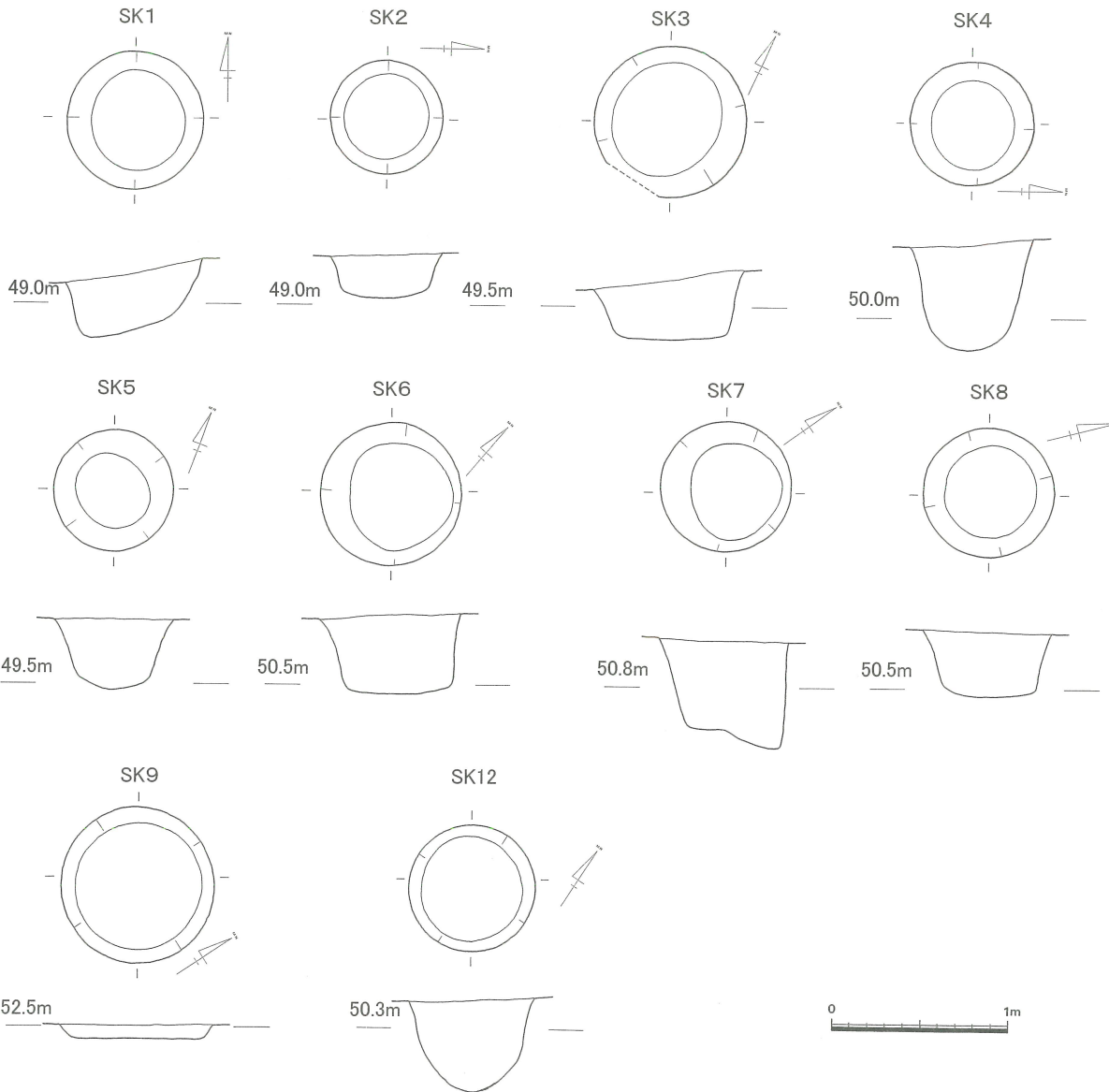
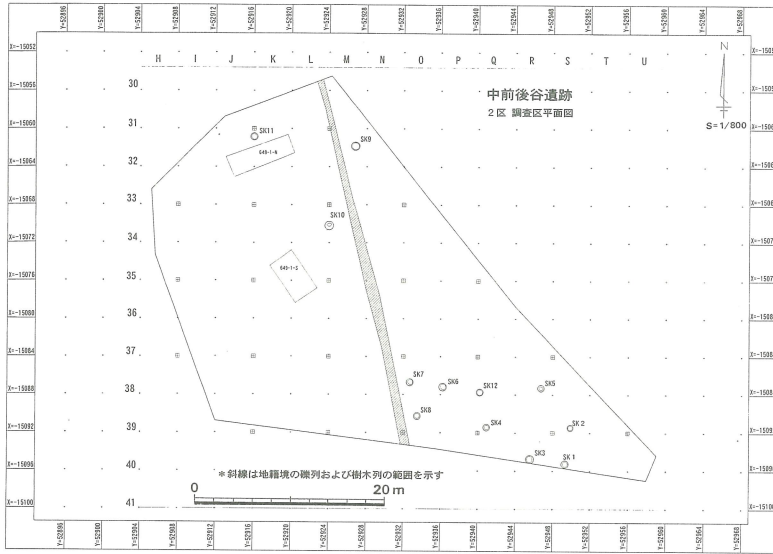
現代の土壌を12基確認した。土壌はいずれも直径約70cm、最深度約45cm程で1層から掘り込まれており、覆土は1層と2層が互層状に堆積している。覆土中から、ビニール片(SK3)・プラスチック片(SK12)・現代の磁器片(SK8)が出土している。このことから、畑として使用されていた時期に掘られた土壌である可能性が高い。用途としてはミカンの木を植える際のものか、耕作の作業において何らかの必要性が生じたものと思われる。



第27図 2区平面図 (S-1/400)



第28図 2区土層図 (S-1/80)



第29図 2区土壌配置図及び平面・断面図 (S-1/40、1/800)

5. 3区の調査（第30図）

1区と2区の間当たる区域であり、調査以前は民家および工場が立地していたとされる。1区と2区の関連性を把握する目的で、505m²を3区として設定し調査を行った。

－ 1) 土層概要

表土の下層は土地改良の際の埋土が岩盤直上まで堆積していた。工場と民家を建てる際に大規模な土地改良工事が行われたと思われる。

－ 2) 遺構

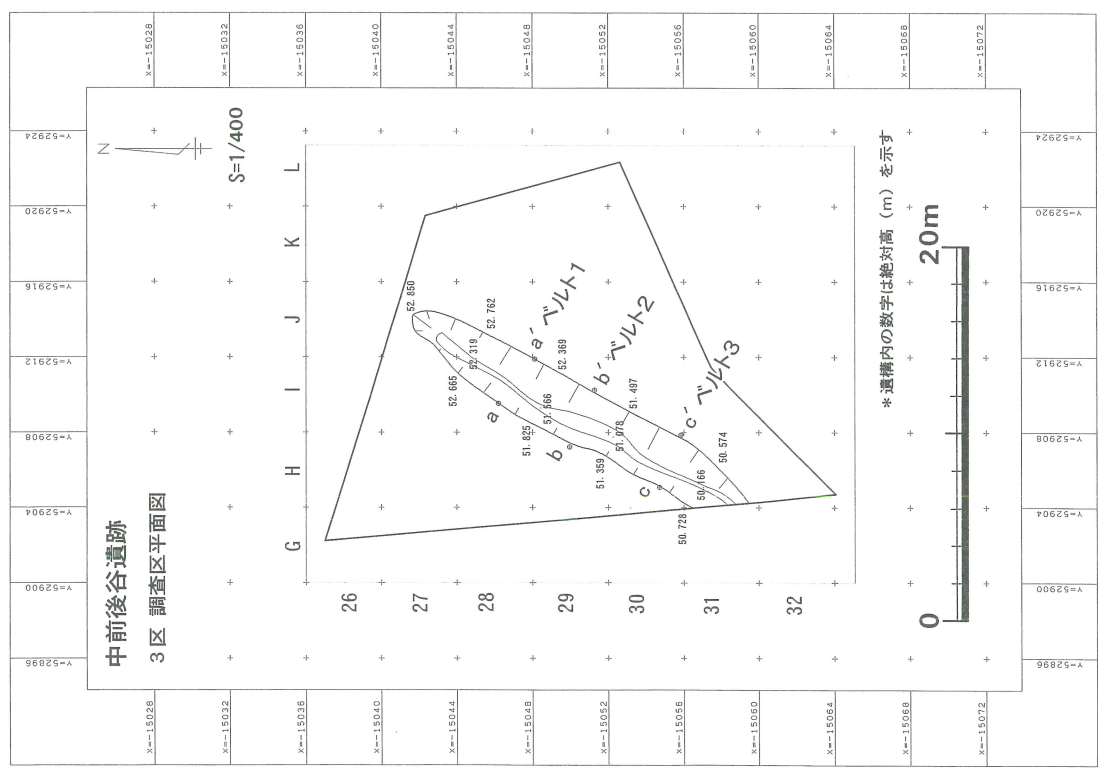
3区を東西に横切る溝が確認された。谷状の地形を利用して作られており、幅約3m・深さ約0.6mである。遺構内の覆土は灰色の軟質土であり、覆土中に10cm～20cm程の礫を充填している。遺構内から現在の陶磁器が確認されたことから土地造成の際に作られた遺構であると考えられる。機能としては、谷状の地形を利用して作られていること、内部に礫を充填していることから、水の通り道としての排水施設である可能性が高い。

区	地点	地点	層位	ob										an		土器	陶磁器	瓦	青磁	青花	計	
				f	uf	ch	石鏃	削器	搔器	石核	細石核	台形	挟入	f	石匙							
3	SD1			1																		1
3	SD1	バルト3	1														13					13
3	表土																	1				1
3	表土							1									1					2
		計		1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	14	1	0	0	0	17

第9表 3区出土遺物集計表

No.	調査区	層位	遺物	眼高	読み値	絶対高(m)
1	1区F11	Ⅱ層	晩期土器	63	3.905	59.095
2	1区E11	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.676	58.824
3	1区E11	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.619	58.881
4	1区E11	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.666	58.834
5	1区E11	Ⅱ層	剥片・黒曜石	59.5	0.776	58.724
6	1区E11	Ⅱ層	剥片・黒曜石	59.5	0.854	58.646
7	1区E11	Ⅱ層	剥片・安山岩	59.5	0.896	58.604
8	1区E11	Ⅱ層	uf・黒曜石	59.5	0.901	58.599
9	1区E12	Ⅱ層	剥片・黒曜石	59.5	0.862	58.638
10	1区E12	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.844	58.656
11	1区E12	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.926	58.574
12	1区E12	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.021	58.479
13	1区E12	Ⅱ層	晩期土器・壺底部	59.5	1.019	58.481
14	1区E12	Ⅱ層	剥片・安山岩	59.5	0.984	58.516
15	1区D11	Ⅱ層	—	59.5	1.227	58.273
16	1区D11	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.428	58.072
17	1区D11	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.534	57.966
18	1区C12	Ⅱ層	剥片・黒曜石	59.5	2.394	57.106
19	1区C11	I層	剥片・黒曜石	59.5	1.662	57.838
20	1区D13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	2.701	56.799
21	1区E13	Ⅱ層	剥片・黒曜石	59.5	1.556	57.944
22	1区E13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.405	58.095
23	1区E13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.642	57.858
24	1区E13	Ⅱ層	剥片・安山岩	59.5	1.352	58.148
25	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.957	58.543
26	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.934	58.566
27	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.93	58.57
28	1区H13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.923	58.577
29	1区H13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.95	58.55
30	1区H13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.974	58.526
31	1区H13	Ⅱ層	uf・黒曜石	59.5	0.947	58.553
32	1区H13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.966	58.534
33	1区G13	Ⅱ層	石核・黒曜石	59.5	1.016	58.484
34	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.106	58.394
35	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.966	58.534
36	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1	58.5
37	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.943	58.557
38	1区H15	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.993	57.507
39	1区H15	Ⅱ層	剥片・黒曜石	59.5	2.021	57.479
40	1区H16	Ⅱ層	晩期土器	59.5	2.424	57.076
41	1区G18	Ⅱ層	晩期土器	59.5	3.339	56.161
42	1区I17	Ⅱ層	砥石・砂岩	59.5	3.2	56.3
43	1区H13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.942	58.558
44	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.001	58.499
45	1区H13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.13	58.37
46	1区H13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.105	58.395
47	1区H13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.099	58.401
48	1区H13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.082	58.418
49	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.957	58.543
50	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	0.965	58.535
51	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.178	58.322
52	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.132	58.368
53	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.225	58.275
54	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.262	58.238
55	1区G13	Ⅱ層	晩期土器	59.5	1.188	58.312
56	1区E15	Ⅱ層	晩期土器	59.5	3.202	56.298
57	3区J27	地山直上	近世陶器	—	—	52.898
58	3区I28	地山直上	自然石	—	—	52.237
59	3区G28	地山直上	晩期土器	—	—	51.642
60	3区G26	地山直上	剥片・黒曜石	—	—	52.718

第10表 ドット・マップ取上遺物一覧

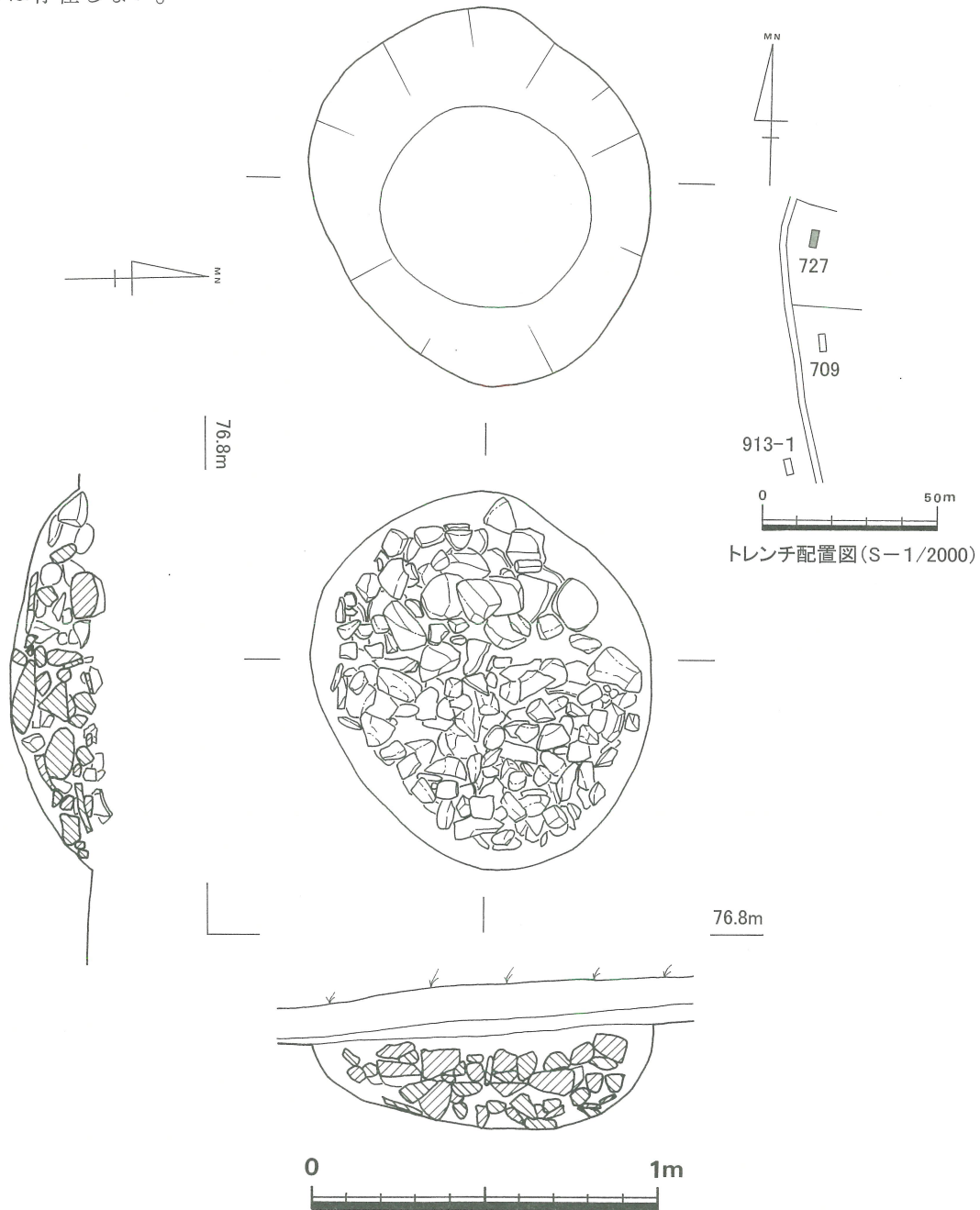


第30図 3区平面図及びミゾ断面図 (S-1/40、1/400)

6. TP10 (第31図、図版7・8)

平成19年度の範囲確認調査時に確認され部分的に調査が行われた「集石遺構」の完掘を目的に調査を行った(福田町727番地)。

集石遺構は直径約1mで深さ約0.2mの土壌である。内部に約10cm~20cm程の礫を充填している。範囲確認調査時に設定されていた土層観察用ベルトを精査した結果、表土下層に褐色土の層を確認し褐色土層から集石遺構が掘り込まれていることが分かった。また、遺構内から磁器が2点出土した。これにより集石遺構の帰属時期は近世以降であることが判明した。畑の耕作時に礫を廃棄した土壌である可能性が高い。なお、礫には着色したものおよび被熱痕があるものは存在しない。



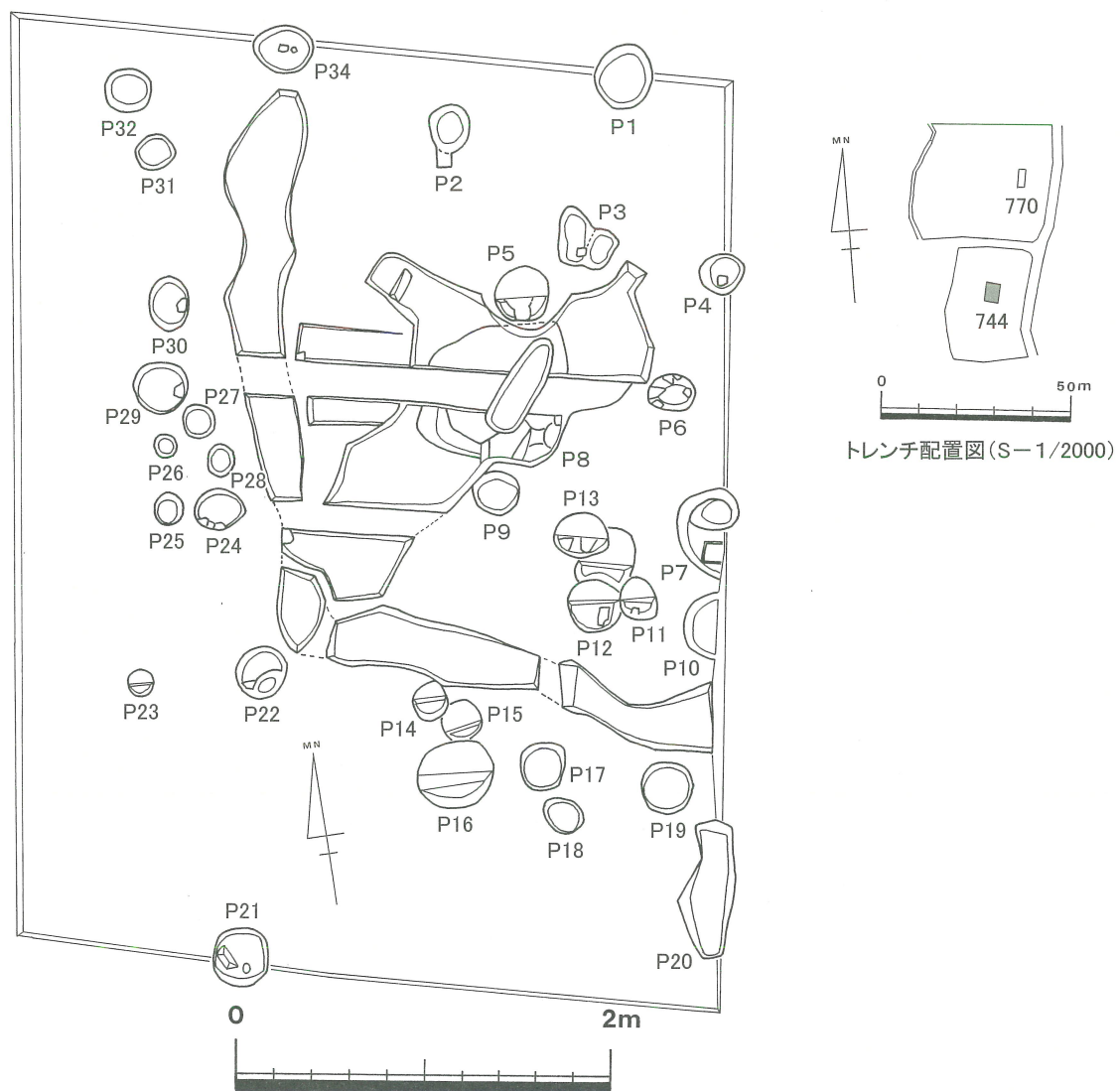
第31図 福田町727番地集石実測図 (S-1/20)

7. TP13 (第32図、図版9)

平成19年度の範囲確認調査時に確認され部分的に調査が行われた「ピット」・「ミゾ状遺構」・「不定形の掘り込み」の完掘を目的に調査を行った(福田町744番地)。

再調査したところ、範囲確認調査後の耕作により大部分が削平されておりピット11基が消滅していた。

残存していた遺構を精査したが、遺物の出土は確認されなかった。「不定形掘り込み」はベルト部分から範囲確認調査時に確認されていた焼土の続きが確認された。



第32図 福田町744番地遺構実測図 (S-1/40)

8. 検出された遺物

－ 1) 土器 (第34図、図版19・20)

1、2はともに縄文早期の所産である押型文土器で、外面に楕円文を施す。内面は平滑。風化し剥離が進んでいる。ともに胎土は石英、黒雲母、安山岩風化礫の粒子を含む。焼成は良好。色調は外面はにぶい黄褐色 (Hue10YR5/4)、内面は黒褐色 (Hue10YR3/2) を呈する。同一個体と思われる。

3は口縁部が4カ所ほどの山形突起をなす深鉢と想定され、縄文後期もしくは晩期の所産と思われる。外面は口縁下5mmに突起から突起へと沈線が廻らされているようで、鋭利なヘラ状工具による施文と思われる。その下に「ハ」の字形の沈線が施文され、さらに「ハ」の字形の沈線の下には短い沈線が入る。口縁下の沈線は口唇部を通り内面に至り、一本の沈線をつくる。胎土は石英、黒雲母、安山岩風化礫の粒子を含む。色調は内外面ともににぶい黄橙 (Hue10YR7/4) を呈し、口縁部は黒変している。

4は縄文晩期の所産である組織痕土器である。外面に網目痕と指頭による凹凸が見られる。内面は平滑。胎土は精良で石英、黒雲母、安山岩風化礫の粒子を含む。焼成は良好で、外面は橙 (Hue2.5YR6/8)、内面はにぶい黄橙 (Hue10YR6/4) を呈する。天地は不詳。

5は縄文晩期の所産で、外面は横方向に条痕を残す。内面は平滑。剥離が進んでいる。胎土は精良で石英、黒雲母、安山岩風化礫の粒子を含む。焼成は良好で、色調は外面は黄褐色 (Hue10YR5/6)、内面は褐色 (Hue10YR4/4) を呈する。

6は復元口径278mmほどの深鉢口縁部片である。口唇部は変化にとんでおり平らに収める部分と、やや尖り気味に収める部分もある。肩部から上方にやや外反しながら伸び上がるものと想定される。調整は器表が荒れており不明である。色調は内外面ともに黄橙色 (10YR7/4) で、焼成は良好である。胎土は黒雲母、安山岩風化粒、石英などを含む。体部から底部を欠損する資料で、埋甕の用に供されたものと想定される。

7は突帯文系甕の底部資料である。底径は80mmほどである。調整は内面タテ方向に強くナデ、外面は体部との接合部より上はタテ方向にミガキ、以下はヨコ方向に磨いて仕上げている。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) で、胎土に黒雲母、安山岩風化粒、石英などを含む。焼成は良好である。

8も突帯文系甕底部資料で、底径80mmほどである。色調は橙色 (7.5YR7/6) で、胎土に黒雲母、安山岩風化粒を含む。焼成は良好であるが、器表が荒れていて調整手法は不明である。

9は復元底径82mmほどの小型壺の底部資料である。やや厚い底部から体部に移行する部分の資料であるが、上位を欠いている。色調は内面にぶい黄橙色 (10YR7/4)、外面橙色 (2.5YR6/8) である。胎土に黒雲母、安山岩風化粒、石英などを含む。焼成は良好である。

－ 2) 石器 (第35～40図、図版16～18)

1はサイコロ状の石核で漆黒の黒曜石を素材としている。a面にはe面から剥離された痕跡

がやや大きいもので3条ほど残り、また対角したc面からの加撃痕を4枚ほど留めている。d面においてはb・e面の2方から剥取されているが、良好な剥片が得られたとは思われない。b面にはc打面からの古い剥離痕が認められ、ネガティブ面をなしている。四角柱状の石核であり、多打面からの剥離痕を残す。剥片は寸詰まりの縦長剥片から鱗状の不定形剥片を産出している。

2は漆黒色の黒曜石剥片を素材とした石核である。輝度がやや低く、旧石器時代に属することを想定させる。a面においては3枚の剥離の後にさらに3回の剥離を行っているが、うち2回の加撃が抜けきらずステップ気味に収束し、段をなしている。このため継続する剥離が困難となっている。b面では90度打面を転位して剥離しており、a・c・d面がe面からの剥離であることから、a面に後続する剥離と想定される。打面e・dはいずれも剥離面を使用しており、調整痕は認められない。剥片は横広のものが剥出され、台形石器などの素材がもたらされたと想定される。c面には3条の樋状剥離が認められ、彫器として機能したことを示している。

3は輝度の高い漆黒色黒曜石を素材としたサイコロ状の石核で、1面に原礫面を留めている。打面を90度ずつ転位させながら剥片剥離を行っており、剥離面からすると2cm前後のやや横広の剥片が剥取されている。打面はすべて未調整である。

4は漆黒色の黒曜石を素材とした石核である。打面は自然礫面で、単一方向からの剥離を行っている。剥離面からは寸詰まりの横広の剥片を剥取したことを窺わせる。a面には9と同様のポジティブ面を残している。

5は三角形状を呈する黒曜石剥片を素材とした石核である。a面右縁には3枚の剥離痕跡が、d面の未調整打面から行われ、左縁には細かい平坦剥離を行っている。また先端部には左から加撃し、さらにc面から加撃を行って先端部を作出している。先端部を錐として機能させるように調整したとは思われず、非常に雑な調整である。

6は漆黒色のやや分厚い黒曜石剥片を利用した石核で、2と同様輝度が低下しており、旧石器時代の所産と思われる。a面右側の大きな剥離面が主要剥離面でポジティブ面である。a面においてはe面を打面として数回の剥離を行うが、寸詰まりの小剥片が剥離されている。打面を90度転位したb面においては、d面を打面として剥離を行っている。複数回の剥離を行うが、加撃圧が抜けきらず段状に収束しており、剥離作業を中止したようである。打面は剥離面を未調整で使用している。

7は漆黒色黒曜石製石核で、不透明感がある。a面やb面と比較してc面の風化度合が低く、本来石核であったものを、後世にも石核として転用したものである。打面は未調整の自然面を打面としている。a面及びb面の剥離痕は対角しており、打面を転位しながら剥離している。c面が最終剥離面であり、本来はより大きな石核であったことを窺わせている。

8は原礫面を多く残す小礫を利用した石核である。灰黒色黒曜石を素材としている。打面は自然礫面を利用し、未調整である。2枚の剥離痕を残している。

9は全面がポジティブ面をなす石核状の黒曜石製品である。白色の不純物を含む黒曜石が素

材である。このような擬似石器状のものは風観岳支石墓群の調査においても104点出土しており、何らかの機能を有するものとして「特殊な石器」として報告している。人為による剥片剥離によって生ずるものとは思われないが、縄文時代晩期に伴うものとして注意を喚起する石器とも想定される。なお風観岳支石墓群の当該品も大きさの点からしてもほぼ同巧・同大のものである。

10は細石刃核のような形状を呈している。a面には調整打面から直接加撃による剥離が行われており8回ほどの剥離痕跡を見せている。また細石刃様の剥離痕跡も4枚ほど認められるが、端部がステップ気味に収束しており、真正な細石刃とは認められない。また中央部には左側からの加撃、下端には上位からの剥離面を認める。この加撃は細石刃核の剥離面の再生剥離とも想定される。b面下端には2条の剥離痕跡を認める。漆黒黒曜石を素材としており、全体に輝度が低下している。

11は風化度の高い黒曜石で、輝度を認めない。背面においては、打面は2箇所を想定させる。背面の大きな剥離はステップ気味に収束している。周縁に微細な使用痕跡を認める。

12は輝度の高い黒曜石剥片で、周縁に微細な使用痕をみとめる。背面には複数回の加撃痕と4枚ほどの剥離痕を留めている。打面は薄く狭小である。

13は輝度の高い良質の黒曜石を素材とした剥片である。単設打面の角礫状の石核から剥取されたもので、断面三角形状を呈している。打面は未調整打面で狭小である。周縁に微細な使用痕が認められる。

14は白色の細かい夾雑物を含む黒曜石剥片で、横広である。背面には複数回の加撃痕を残し、打面は原礫面を残す未調整打面である。下半部に大きく原礫面を残している。腹面には大きな打裂痕を残している。左縁中ほどに弧状に刃部を作り出している。

15は淡灰黒色を呈する良質の黒曜石を素材にした大型の横広剥片である。背面には右縁に一部原礫面を残している。単設打面の石核から剥取されており、背面に3枚の剥離痕跡を留めている。端部は背面側からの加圧により折り取られている。打面は調整打面であるが、左半分は厚く残り、右半分は線状になっている。この打面側の左側部分に腹面側から急傾斜の調整剥離を行って搔器の刃部を作出しているが途中で終了している。

16は多打面を有する石核から剥取された剥片で、下端は腹面側からの加圧で折り取られている。これからすると石核は大型のものであったことを想定させる。背面には4枚の剥離面を残し、右側には大きく原礫面を留めている。周縁に微細な使用痕跡を認めることができる。輝度の高い良質の黒曜石である。

17は両設の打面を有する石核から剥取された剥片で、上方からの剥離面3枚と下からの剥離面1枚、原礫面を留めている。打面は未調整である。漆黒黒曜石で良質である。

18は多打面を有する石核から剥取された断面三角形状でクサビ状の剥片である。腹面には横位の剥離痕を残し、背面には下位からの剥離面を2枚残している。また左方からも剥離を行っているが、ステップ気味に収束したため良好な剥片の剥取が行えず中断している。刃部は背面

下縁に鋸歯状に2箇所刃部を急傾斜調整で作出している。漆黒黒曜石である。

19は単設打面の石核から剥取された剥片を素材にした搔器である。打面は調整打面で、背面に1枚のやや大きな剥離痕を残している。背面左縁部は腹面からの折り取を行い、刃部を作り出そうとしたが、十分な急傾斜剥離が行われていない。また下縁には腹面側から弧状に急傾斜剥離を行って刃部を作り出している。

20は両極打面の石核から剥取された初期段階の剥片で、やや肉厚で亀の甲様を呈している。背面には原礫面を残し、3枚の剥離痕を留めている。打角は100度ほどである。右縁上部及び下縁に急角度の施刃を行い、搔器として機能させている。素材は白色の夾雑物を含み縞状斑晶のある黒曜石である。

21は多打面石核から剥取されたやや分厚い横広剥片を素材としている。背面下縁には腹面から急傾斜剥離を、腹面上縁には背面から打瘤部を除去するように傾斜剥離を行って施刃している。上・下縁の対向する部分の調整剥離は台形石器の調整方法と同様であるが、当該石器は旧石器時代のものでなく、縄文期の所産である。細い縞状の模様を持つ漆黒黒曜石である。

22はステップエンドした剥離痕跡を多く留める打面部を、腹面で調整剥離した部分に施刃した削器である。施刃は腹面から角度のある調整を行っている。白色夾雑物を含む黒曜石を素材にしている。

23は単設打面から剥取された原礫面を残す肉厚の剥片を素材とした搔器である。打面部は原礫面を残し、未調整である。背面には3枚の剥離痕を留めている。下縁は腹面側からの加圧で折り取り、腹・背面から成形している。この成形面に接して左縁に急傾斜剥離を行い、施刃している。

24は19と形状が近似するが、別の石核から剥取されている。剥片剥離は単設の打面を未調整で行っている。背面右縁は腹面側から傾斜剥離を実施し、腹面右縁には平坦剥離に近い傾斜剥離を背面側から行い、施刃している。漆黒黒曜石で輝度が高い。

25は背面に多く原礫面を残す剥離初期段階の剥片を素材とした搔器で、亀の甲状を呈している。施刃は左側縁に急角度で厚くなされている。打面は原礫面を残す未調整打面である。縞状の斑晶を有する黒曜石を素材としている。

26は透明感のある良質の黒曜石を素材とした台形石器である。横広の剥片を横位に用い、左縁の調整は、下位は背面から、上位は腹面から急傾斜剥離を行い調整している。右縁は打面をそのまま利用しており未調整である。背面下位からの剥離は厚さを減ずるための調整剥離である。刃部は外湾しており、微細な使用痕が認められる。

27は三稜尖頭器で安山岩を素材としている。やや横広の分厚い剥片を縦位に分割したと見られるが、背面や切断面に原礫面を多く残すことから、剥片剥離初期段階のものを利用しているようである。腹面には基部の調整を行い、また先端部にも切断面からの細調整をおこなって尖頭部を作出している。錐としての機能を併せ持つようだ。背面には腹面からと稜線からとの急傾斜剥離を行って体幹の成形を行う。黒色の安山岩であるが、全体に風化の度合いが高い。

28は多くの剥離面からなる尖頭状の剥片を素材とした石錐である。錐部は腹面側から角度のある調整により作出し、断面菱形を呈している。上面は折り取り面で、腹面側から2回の加圧で切断している。漆黒色の黒曜石である。

29は灰茶色の黒曜石を素材としている。未調整打面から剥取された剥片を横位に用いるため腹面側から切断している。その切断面から細調整を行い、また対向する面から腹・背面に細調整を行って錐部を作出している。断面は長方形を呈している。

30は一次剥離面を打面に有する石核から剥取されたやや縦長の剥片を素材としている。打面は単設打面で、複数回の剥離痕跡を残している。施刃は背面右縁に腹面から急傾斜剥離で円弧状に行っている。石材は透明感のある良質の黒曜石である。

31は原礫面を残す打面から剥取されたやや縦長の剥片を素材としている。背面には5枚ほどの剥離痕を残し、単設の打面であることを示している。下端は腹面からの加圧で折り取り、この部位と、接続する腹面左縁に施刃している。透明感のある良質の黒曜石である。

32は多打面石核から剥取された不定形の剥片を素材としており、打面右側に弧状に抉りを背面から急傾斜剥離している。透明感のある良質黒曜石である。

33は多打面石核から剥取された不定形剥片を素材としている。打面部は腹面からの加圧で折り取られている。刃部は下縁に腹面側から急傾斜調整を行い、この調整に接して腹面右下縁に背面から弧状に調整を施す。素材は白色夾雑物を含む黒曜石である。

34はやや横広の剥片を素材として、左下縁に主要剥離面側から抉入り状に施刃している。抉入りの刃幅は18mmである。打面は背面側からの加圧により折り取られている。透明感のある黒曜石を素材とし、一部原礫面を残している。

35はやや横広の剥片を素材にしている。背面には4枚ほどの小さな剥離痕を残し、左側に原礫面を留めている。背面右縁に弧状に腹面からやや角度のある調整を行って施刃している。漆黒色の良質黒曜石である。

36は単設打面の石核から剥取されており、背面に2枚の剥離面を残している。打面は未調整である。両側縁に使用痕跡を認めることができる。素材は白色の夾雑物を含む、透明感のある黒曜石である。

37は両設打面石核から剥取されたやや肉厚の剥片である。打面は未調整で、打角は120度ほどである。背面には6枚ほどの剥離面を残し、最後の右端の剥離はステップして収束し、良好な剥片の剥取は行われていない。下端には原礫面を打面として剥離した面を1枚残している。背面左縁に使用痕跡を認める。漆黒黒曜石で良質である。

38はa面とb・c面の風化度が明らかに異なる剥片を素材とした削器である。刃部は右縁から下縁にかけて施刃されている。漆黒の良質黒曜石である。

39は打面調整を行った単設打面の石核から剥取された剥片を素材とした削器である。背面の剥離痕からすると、やや縦長の剥片が剥取されている。刃部は左縁に施刃され、角度のある調整と、弧状の調整が行われている。漆黒色の良質の黒曜石である。

40はやや横広の不定形剥片を素材とした削器で、右側縁下部に腹面から施刃している。単設打面の石核から剥取されている。打面は未調整である。透明感のある良質黒曜石である。

41は単設打面の石核から剥取された、やや肉厚の剥片で、背面に身の薄いやや横広の剥片を剥取した痕跡を残している。刃部は腹面右縁に角度のある施刃を行う。漆黒黒曜石で、やや輝度が低い。

42はやや大型の不定形剥片を素材にしている。打面部は主要剥離面側から折り取り、対向する下部に、背面から平坦剥離を行って刃部を形成している。単設打面石核から剥取されている。白色の夾雑物を多く含む黒曜石である。

43は基部加工を有するナイフ型石器の搔器への転用品と思われる。背面右側縁には急傾斜の調整が行われ、腹面基部には平坦剥離が施されている。打面は未調整で、やや横広の剥片であったことが腹面の剥離面の様子から窺われる。体幹は中ほどで背面からの加圧で切断され、機能を停止したものと思われる。その後、腹面からの加圧で幅を減じ、さらに打面方からの調整で身幅を整えている。漆黒黒曜石を素材とし、全体に風化が進み、輝度が低下している。

44は原礫面を打面とする石核から剥離された剥片で、左縁に残る一段階前の剥離面を急角度調整して刃部を設けている。下及び右縁は腹面からの加圧で折り取り、成形している。腹面左縁にも背面からの調整で、刃潰し状の調整を行っている。白色の夾雑物を含む黒曜石である。

45は打面・右縁に原礫面を残す不定形剥片を素材にしている。背面には2枚の剥離面が看取される。刃部は42と同様主要剥離面側に背面から平坦剥離状に行われている。漆黒色黒曜石である。

46は多打面石核から剥取された剥片を素材としている。打面は未調整で狭小である。右下縁に主要剥離面側から8mmほどの抉入り状に施刃している。透明感のある輝度の高い黒曜石である。

47は不定形剥片を素材とした削器で、打面両縁に主要剥離面側から抉状に施刃している。背面左側には原礫面を残し、対角する打面からの剥離痕を残している。

48は単設の打面を有する石核から剥取された剥片を素材とした搔器で、ほぼ全周に施刃されている。施刃は腹面から主として行われ、腹面にも僅かに剥離痕を残している。施刃は角度のある調整である。漆黒黒曜石を素材としている。

49は背面右側に大きく原礫面を残す。単設打面の石核から剥取され、打面部は背面からの加圧で折り取られている。背面左縁に腹面からの調整で鋸歯状に角度のある調整がなされている。白色夾雑物を含む黒曜石を素材としている。

50は透明感はあるものの夾雑物をやや含む黒曜石の不定形剥片を素材としている。剥取された剥片の石核は多打面を有する、打面未調整の石核である。刃部は下縁左側に施刃され、主要剥離面側から角度のある調整が行われている。

51は多打面石核から剥取されたやや縦長の剥片を素材としている。刃部は両側縁に施刃され、つまみ型石器様を呈するが、端面が原礫面であり、削器として機能している。素材は縞状斑晶

を有する黒曜石で、良質である。

52は両設打面を有する石核から剥取された剥片を素材にしている。刃部は右下縁に円弧状に施刃されている。施刃は主要剥離面側から急傾斜の調整を行う。円弧の径は4mmを測る。

53はやや縦長の不定形剥片を素材にしている。打面は未調整で、原礫面を残している。背面には対角する打面から剥取された剥離痕を残している。施刃は両縁に主要剥離面側から施されている。

54は単設打面の石核から剥取された剥片を、縦に半割して、その折取面に急角度で施刃している。透明感のある良質黒曜石である。

55は両設の打面から剥取された剥片を素材としている。背面右側の3回の剥離痕は厚さを減ずる調整剥離である。刃部は左縁に行われており、腹面から連続的に行われている。打面は原礫面を残す未調整打面である。素材は白色の夾雑物を含む黒曜石である。

56は打面調整を行った単設打面の石核から剥取された剥片を素材にした削器である。刃部は背面左縁に腹面から細調整を行って施刃している。輝度のある良質黒曜石である。

57は単設の打面をもつ石核から剥取された薄手の縦長の剥片を素材にしている。刃部は下縁に弧状に背面側から施刃している。輝度の高い透明感のある黒曜石である。

58は原礫面を有する打面から剥取された縦長剥片である。背面には左方からの加撃による痕跡を留めている。右面は原礫面を留めており、原石が角礫状であったことを窺わせる。腹面右縁には細調整が施されている。黒色の安山岩であるが、全体に風化し灰色を呈している。

59は黒曜石の多打面石核から剥取された薄手横長剥片を素材とし、上縁は直線状に、下縁は鋸歯状に主要剥離面側から急傾斜の剥離を施している。

60～78は石鏃である。分類については従来の形態分類に基づいて行った。すなわち、下峰原高場遺跡や風観岳支石墓群の石鏃分類に準拠している。

石鏃は全体の「かたち」で14分類、「抉り方」で6分類した。

石鏃の型式では、有茎式は検出されず、無茎式において平基無茎式と凹基無茎式に分類した。凹基無茎式は、さらに「かたち」で

- 1…二側縁が直線で三角形を呈するもの
- 2…二側縁が外側に湾曲するもの
- 3…二側縁が内側に湾曲するもの
- 4…左右が非対称形のもの
- 5…基部が左右非対称のもの
- 6…五角形を呈するもので、肩部が上位にあるもの
- 7…五角形を呈するもので、肩部が下位にあるもの
- 8…七角形を呈するもの
- 9…逆ハート形を呈するもの
- 10…下半は大きく外反し、上位は1・2に類するもの

- 11… 2 A型で最大幅が体幹中位近くにあるもの
 12… 6 A型で二側縁の下方が抉れるように内湾するもの
 13… 6 A型を基本とし、体幹が寸詰まりのもの
 14… 13A型を基本とし、尖端部を認めないもの
 と分類される。

さらに基部の「抉り方」で

- A…抉りこまないもの
 B…浅く弧状に抉りこむもの
 C…体幹の中心に向け直線的に抉りこむもの
 D…Cより深く抉りこむもの
 E…丸く抉りこむもの
 F…抉りこみが体幹中位近くまで認められるもの
 と類別した。

	A	B	C	D	E	F	不明	計	%
1		1			1			2	10.53
2	2	1		1	4			8	42.11
3		1						1	5.263
4			1					1	5.263
5			1					1	5.263
6								0	0
7								0	0
8	1							1	5.263
9								0	0
10							2	2	10.53
11		2						2	10.53
12								0	0
13								0	0
14							1	1	5.263
計	3	5	2	1	5	0	3	19	100

第11表 石鏃形態分類表

1 B類…60

小さな石鏃であるが素材面を残さないような丁寧な剥離を行っている。尖端部及び両脚部を欠損している。先端部の欠損は抉り部分まで達しており、また両脚部は脚端方からの加圧で折損している。漆黒色黒曜石製。

1 E類…62

扁平な素材を用いて、両面を研磨している。灰茶色黒曜石製。

2 A類…65、66

65は片脚を欠損している。背面は一事剥離面を残すものの周縁より平坦剥離で成形し、腹面は調整剥離を行うものの素材面を多く残している。漆黒黒曜石製。66はやや横広の剥片を素材としており、腹面には打裂を残している。腹・背面ともに素材面を多く残すように、最小限の調整剥離を行う。輝度が低い黒曜石製。

茎式 かたち	平 基	凹 基					
	無 茎 式	A	B	C	D	E	F
1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							
8							
9							
10							
11							
12							
13							
14							

第33図 石鏃形態分類図

2 B類…67

外湾する刃部を持つように成形されたもので、腹面に一部素材面を残すほかは周縁より丁寧に平坦剥離で仕上げている。漆黒黒曜石製。

2 D類…74

やや外湾するように仕上げられたもので、周縁より丁寧に調整されており、素材面を認めない。薄灰色黒曜石製。

2 E類…63、64、72、73

63、64は相似た形状を示している。扱りは円弧状に、脚端は直線的に、両縁との接点部は猫足状に作出される。72はやや寸詰まりのもので、先端部から左脚にかけて欠損している。73は腹面に素材面を残し、背面には周縁から平坦剥離を実施して成形し、その後背面のみ研磨している。いずれも漆黒黒曜石製。

3 B類…76

内湾する刃部を有するものである。一次剥離面を残さないように丁寧に細調整している。両脚ともに欠損している。透明感のある良質黒曜石製。

4 C類…75

やや厚い剥片を素材としている。両縁が非対称の石鏃である。一次剥離面は僅かに認めるが、丁寧に細調整されている。先端部を欠損している。漆黒黒曜石製。

5 C類…61

やや内湾気味の体幹を示し、両脚の仕上げが大いに異なっている。透明感のある良質黒曜石製である。

8 A類…68

先端部に近い位置に肩部を作出している。一次剥離面を認めないように周縁より調整されている。先端部及び両脚端を欠損している。

10類…71、77

71は素材面を多く残している。周縁より最小限の調整で成形している。背面左縁は傾斜剥離、右縁は平坦剥離で仕上げ、腹面は先端部のみを調整剥離して打瘤部を除去している。体幹下部は腹面からの加圧で折損している。77は先端部のみ資料であるが、素材面を残さないように丁寧に調整されている。ともに透明感のある良質の黒曜石である。

11 B類…69、70

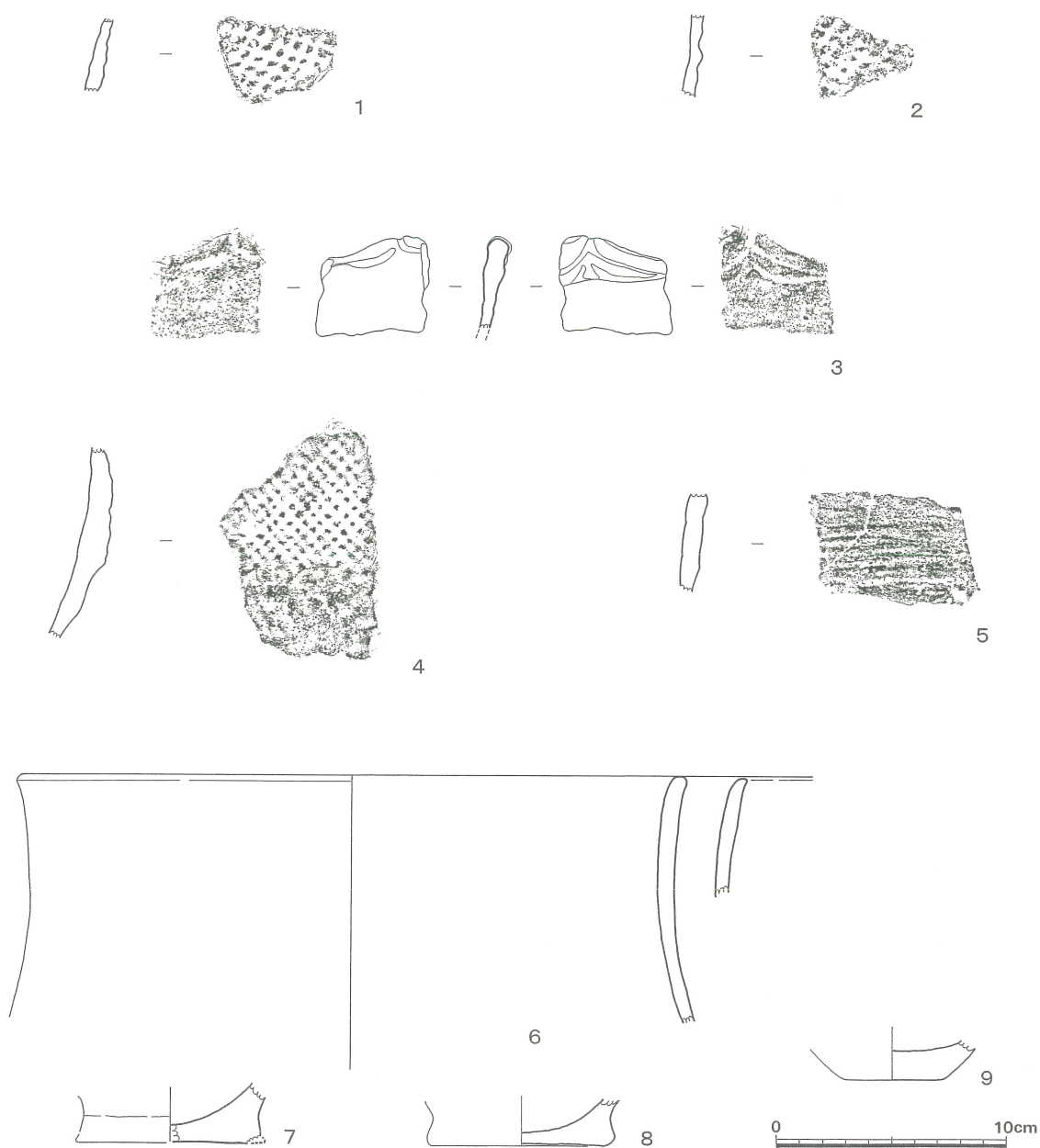
69は先端部を大きく折損している。扁平な素材を用い、周縁より丁寧な平坦剥離を実施して成形している。風化度が高く、輝度の低い黒曜石製である。70は黒色安山岩製で、灰色に風化している。先端部を大きく折損している。周縁よりの調整は体幹中ほどまでは及ばない。

14類…78

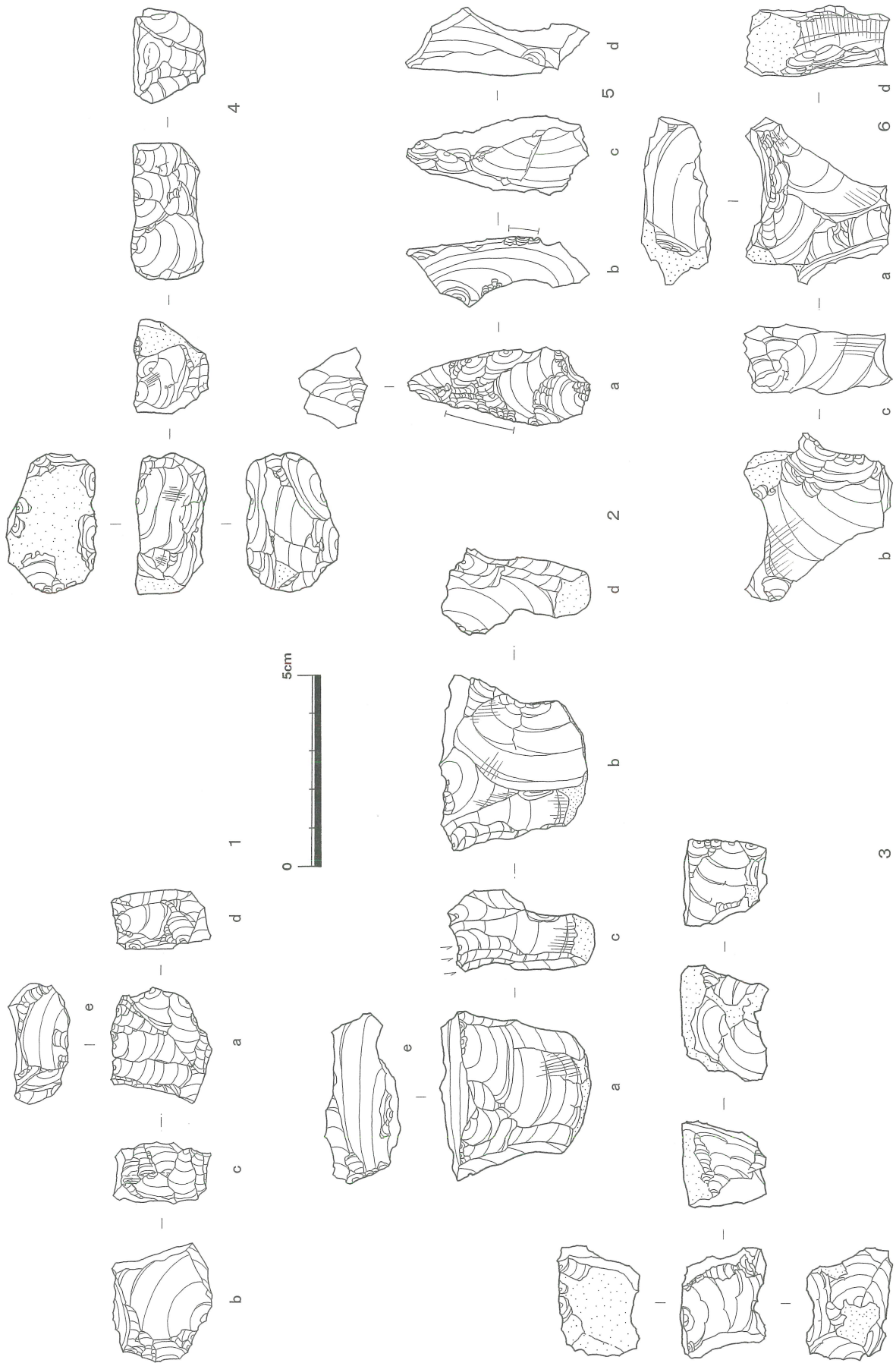
この類に含めるか疑問があるものの、石鏃と同様の調整手法で成形されており、一応この類に含めておく。先端部は大きく折損している。背面は周縁より丁寧に平坦剥離が施され、腹面

は左縁からの平坦剥離を認めるが、多くの一次剥離面を残している。

79は砂岩製の円盤状石製品である。節理面で薄く板状に割れた素材を、周縁から調整して円盤状に仕上げている。



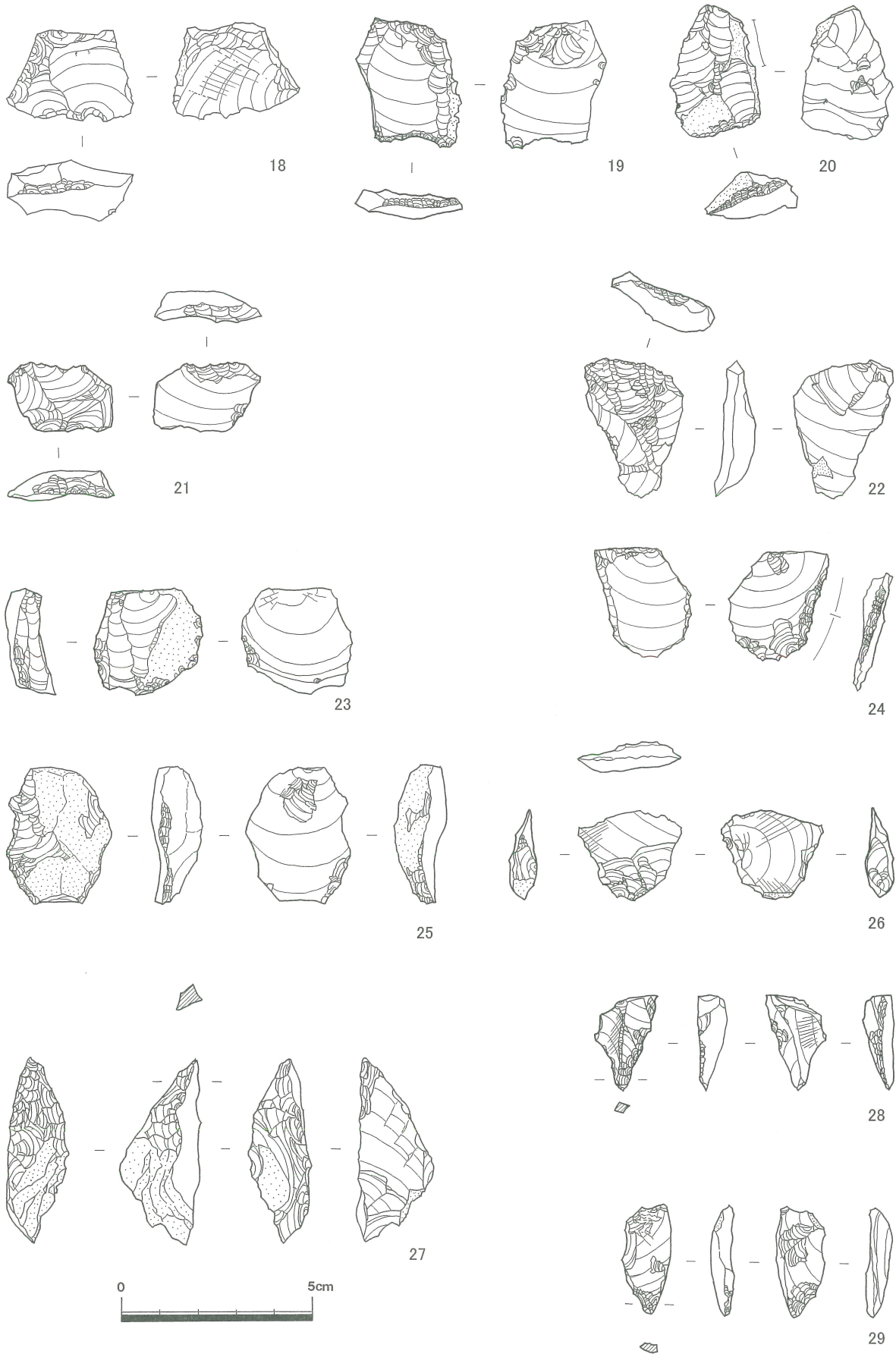
第34図 遺物実測図1 (S-1/3)



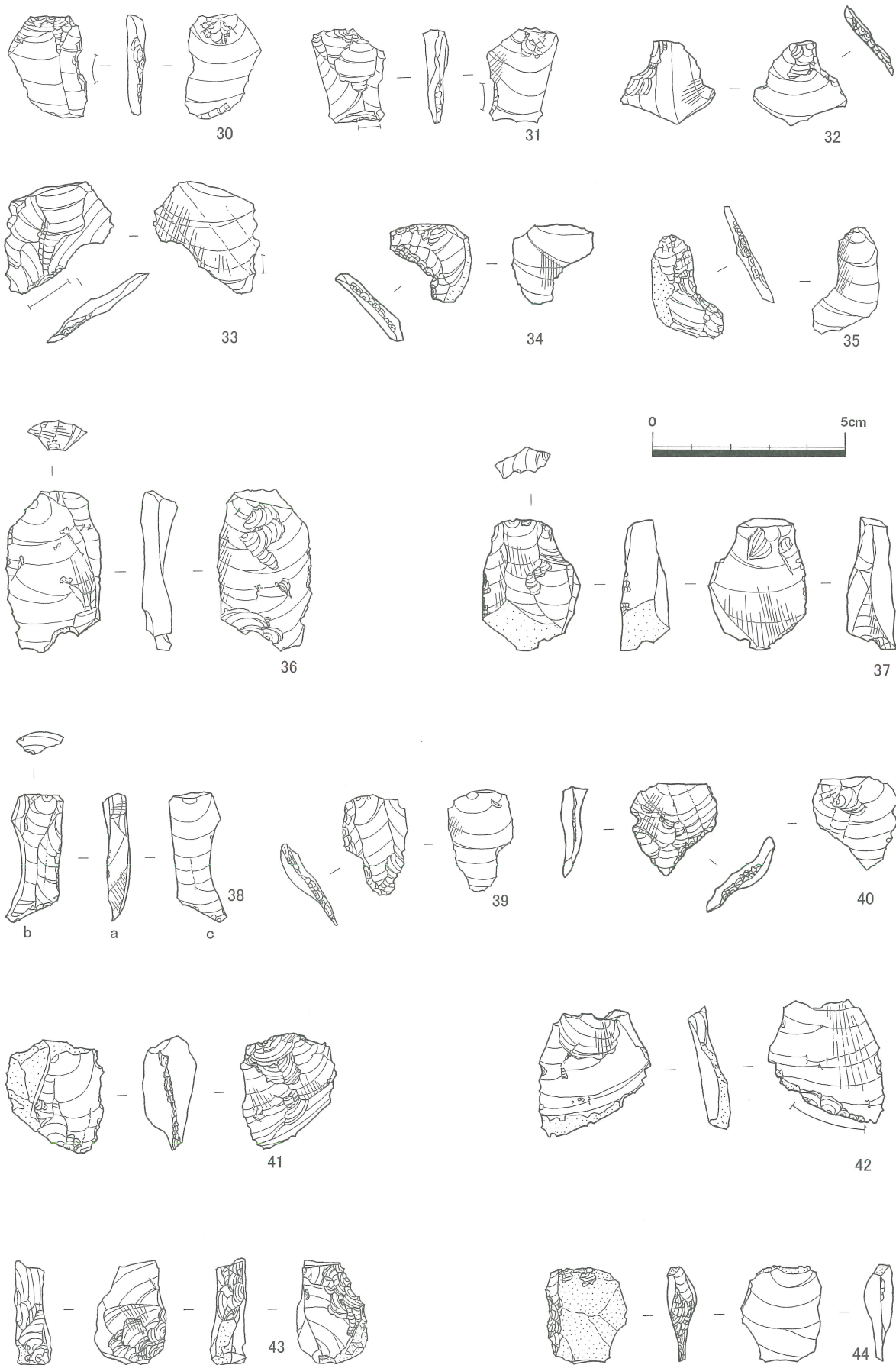
第35图 遺物実測图2 (S-2/3)



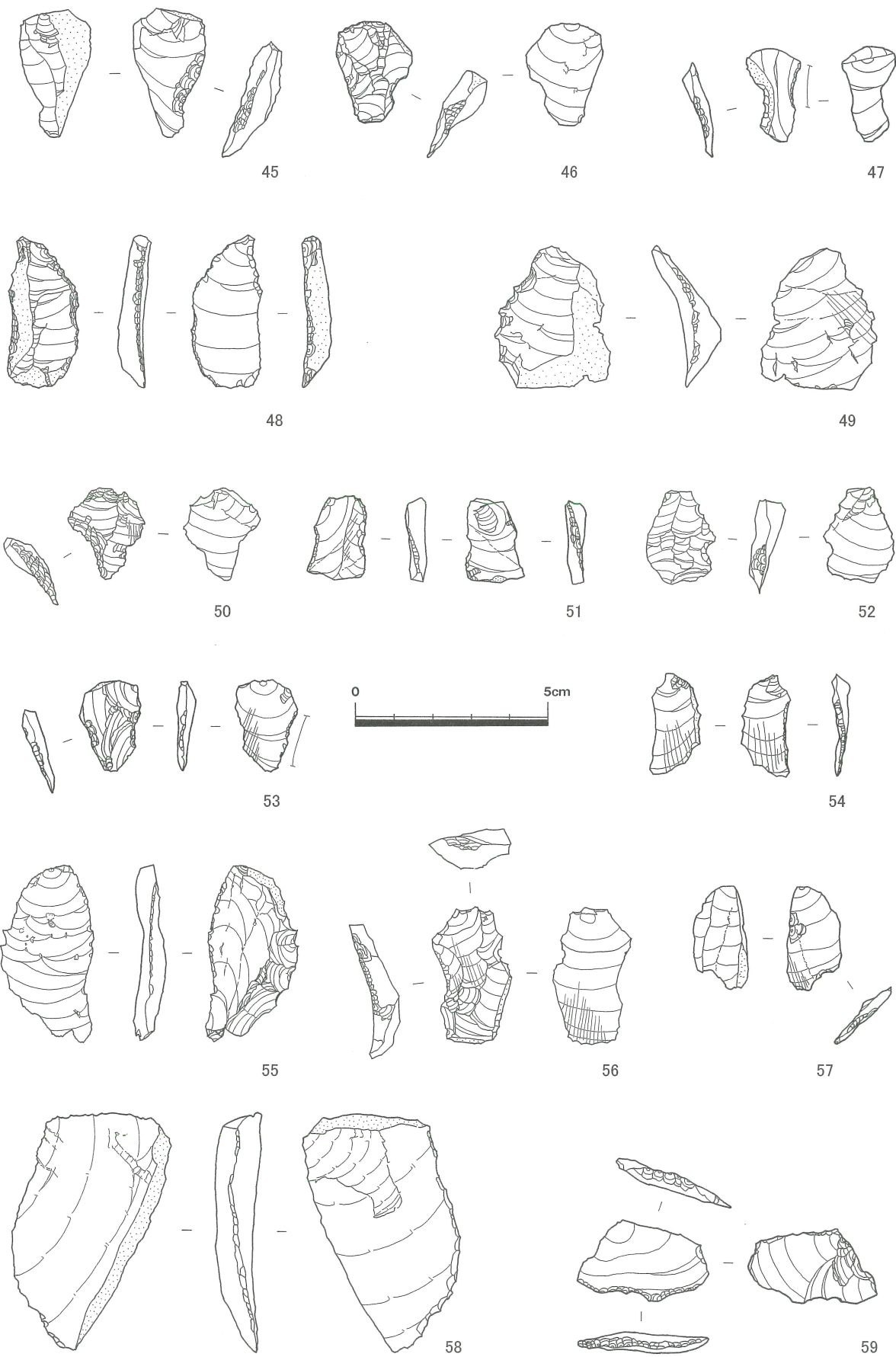
第36图 遺物実測図3 (S-2/3)



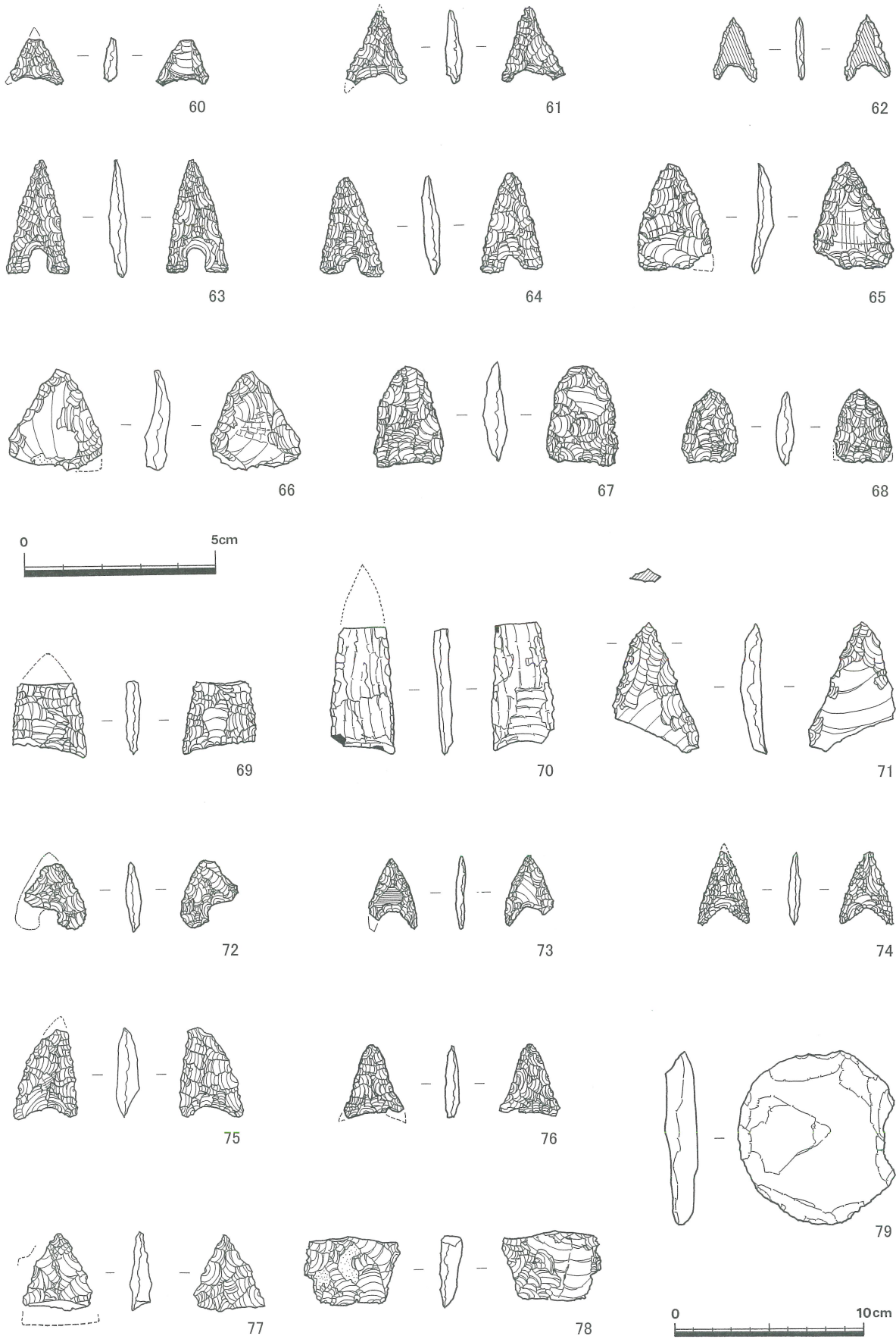
第37图 遗物实测图4 (S-2/3)



第38图 遺物実測図5 (S-2/3)



第39图 遺物実測图6 (S-2/3)



第40図 遺物実測図7 (50~78はS-2/3、79はS-1/3)

挿図番号	No.	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地点	備考
			(mm)	(mm)	(mm)	(g)	略記号	
33	1	土器					08N Z 2区K39. 2層	
33	2	土器					08N Z 2区L37. 2層	
33	3	土器					08N Z 1区東西ベルト	
33	4	土器					08N Z 1区D11. No15	
33	5	土器					08N Z 2区J37. 1層	
33	6	土器						
33	7	土器						
33	8	土器						
33	9	土器						
34	1	石核	25.5	30.5	16	13	08N Z 2区L36. 1層	
34	2	石核	39.5	44.5	20	27.8	08N Z 1区 21層	
34	3	石核	22.5	29	21.5	14.4	08N Z 1区F 6. 1層	
34	4	石核	24.5	36.5	20	17.6	08N Z 2区M37. 1層	
34	5	石核	48	21	18	10.3	08N Z 2区H	
34	6	石核	39	43.5	18	21.7	08N Z F 6. 2層	
35	7	石核	40.5	33.5	27.5	30.3	08N Z 2区L36. 1層	
35	8	石核	20	33	14.5	8.4	08N Z 2区M39. 1層	
35	9	石核?	21	18	15.5	5	08N Z 2区M39. 1層~2層	
35	10	細石核?	32.5	23	15	7.5	08N Z 2区37. 1層	
35	11	剥片	32	26.5	7	3.8	08N Z 2区K38. 1層	
35	12	剥片	34.5	17	7	2.9	08N Z 2区J34. 2層	
35	13	uf	47	20	13.5	8.4	08N Z 2区R40. 2層	
35	14	削器	32	33.5	8.5	5.5	08N Z 2区29. 1層	
35	15	搔器	39	61	13	18.9	08N Z 1区F 6. 1層	
35	16	uf	49.5	21	11	6	08N Z 2区N37. 1層	
35	17	剥片	32.5	22	7	4.1	08N Z 2区T40. 2層	
36	18	削器	24	33	16	9.3	08N Z 2区28. 1層	
36	19	搔器	33	28.5	8	5.9	08N Z 2区N35. 2層	
36	20	搔器	35	24	13	5.7	08N Z 2区K37. 2層	
36	21	搔器	18	27.5	8	3.4	08N Z 2区K31. 1層	
36	22	削器	36	26	9	5.5	08N Z 2区N35. 1層	
36	23	搔器	28	29	12.5	7.6	08N Z 2区Q38. 2層	
36	24	削器	28.5	25	7.5	3	08N Z 2区L38. 1層	
36	25	搔器	36	27.5	14	10.8	08N Z 2区L39. 2層	
36	26	台形石器	23.5	27	7.5	3.2	08N Z 1区F 6. 1層	
36	27	三稜尖頭器	48.5	21.5	15.5	11.6	08N Z 2区M39. 1層	
36	28	石錐	25	16.5	8	1.8	08N Z 2区L38. 1層	
36	29	石錐	29	13	7	2.1	08N Z 2区N38. 2層	
37	30	削器	27	20	5	1.9	08N Z 2区N39. 2層	
37	31	搔器	24.5	19	7	1.8	08N Z 2区J34. 2層	
37	32	削器	22	24.5	4.5	1.2	08N Z 2区L38. 1層	
37	33	搔器	33.5	22.5	5	2.8	08N Z 2区28. 1層	
37	34	削器	20	21.5	7	1.5	08N Z 2区Q38. 2層	
37	35	搔器	27	15.5	4	1.2	08N Z 2区N39. 1層~2層	
37	36	uf	41.5	25	9.5	6.5	08N Z 1区13. 1層	
37	37	uf	35	25.5	13	9	08N Z 1区13. 1層	
37	38	削器	33.5	15	7.5	2.6	08N Z 2区K35. 2層	
37	39	削器	26	17	6	1.7	08N Z 2区K37. 1層	
37	40	削器	26.5	20.5	7.5	1.8	08N Z 2区N38. 2層	
37	41	搔器	29.5	25	14.5	7.4	08N Z 2区29. 1層	
37	42	削器	32	30	10	4.1	08N Z 1区G 8. 1層	
37	43	搔器	27.5	18	9.5	4.4	08N Z 2区M38. 1層	
37	44	搔器	24.5	21	8	3	08N Z 2区H	
38	45	削器	33.5	19	9.5	4.3	08N Z 2区J38. 1層	
38	46	削器	25.5	22	9	2.7	08N Z 2区28. 1層	
38	47	削器	24.5	14	5.5	1	08N Z 2区T33. 2層	
38	48	搔器	39	18.5	9	4.6	08N Z 1区B 8. 2層	
38	49	削器	37	30.5	18	7.4	08N Z 1区G 8. 1層	
38	50	削器	24	20	7	1.7	08N Z 2区M36. 1層	
38	51	削器	22	15.5	6	1.4	08N Z 1区E 3. 2層	
38	52	削器	24.5	18.5	8	2.2	08N Z 2区K37. 1層	
38	53	削器	23.5	17.5	4.5	1.3	08N Z 2区M37. 2層	
38	54	搔器	27	13	5	0.8	08N Z 2区O38. 2層	
38	55	削器	45.5	24	8.5	6.1	08N Z 2区K35. 2層	
38	56	削器	35	20.5	11	4.3	08N Z 2区K38. 1層	
38	57	削器	27	14.5	4	0.9	08N Z 2区M37. 2層	
38	58	削器	62	41	12	25.2	08N Z 1区G 9. 2層	
38	59	削器	32	21	6	3	08N Z 2区L39. 1層	
39	60	石鏃	12	14	3.5	0.4	08N Z 2区M36. 1層	
39	61	石鏃	19	16	4.5	0.7	08N Z 1区C 3. 2層	
39	62	石鏃	17	12	2	0.3	08N Z 2区N38. 1層	
39	63	石鏃	30	16	4.5	1.4	08N Z 2区K36. ベルト2層	
39	64	石鏃	26	16.5	4	1.2	08N Z 2区N39. 1層	
39	65	石鏃	23	20	4.5	2	08N Z 2区J37. 1層	
39	66	石鏃	26	24	6	2.8	08N Z 2区Q38. 2層	
39	67	石鏃	26	19	4.5	2.3	08N Z 2区M37. 1層	
39	68	石鏃	19	15	4.5	1	08N Z 2区K39. 1層	
39	69	石鏃	19.5	19.5	4	1.3	08N Z 2区O36. 2層	
39	70	石鏃	33	17	5	2.5	08N Z 2区M38. 1層~2層	
39	71	石鏃	35	22	7	2.8	08N Z 2区I 33. 2層	
39	72	石鏃	18	15.5	4	0.7	08N Z 2区D39. 2層	
39	73	石鏃	19	13	3	0.3	08N Z 1区F 7. 2層	
39	74	石鏃	19	14	3	0.5	08N Z 2区K38. 2層	
39	75	石鏃	23	17	6	1.6	08N Z表採	
39	76	石鏃	19	16	4	0.7	08N Z 2区J38. 1層	
39	77	石鏃	20.5	18	5.5	1.2	08N Z M39. 2層	
39	78	石鏃	18.5	26	6	2.7	08N Z 2区K39. 1層	
39	79	円盤状石製品	90	82.5	17.5	142.6	08N Z 2区I 37. 1層	

第12表 本調査遺物計測表 (N Zは中前後谷の略)

V. 総 括

前章までにおいて小豆崎地区の畑地帯総合整備事業内に包括される遺跡について概要を述べたが、ここで若干のまとめを行って総括としたい。

中山遺跡は中前後谷遺跡西方丘陵に所在する遺跡で、小豆崎溜池とは谷を一つ隔てて、ほぼ同高度に位置している。本遺跡では福田町727番地や744番地において、遺構の残存度は低いものの集石遺構や住居跡と想定される遺構が確認された。このことは、多良山麓丘陵地の遺跡利用の一形態を示すものとして理解される。集石遺構の確認は本市多良山系域では初出であり、類例の増加が望まれるところである。

正津遺跡は中前後谷遺跡東方丘陵に所在する遺跡で、小豆崎溜池とは谷を一つ隔てている。本遺跡は馬蹄形上に広がる地形を示しており、小さな谷頭をなして南に開口しており、地形上において良好な場所である。本遺跡においても中山遺跡同様、人的営為が相当程度認められたが、小豆崎町1152番地などにおいて柱穴状ピットや、炭化物や焼土を含むピットが検出されるなど、生活域としての利用形態が確認されたことは重要であった。ただ、遺構の残存度が低下していたことは同様地形に立地する遺跡のあり方を示唆しているものと想定される。小豆崎町1427番地において確認された須恵器は、周辺遺跡が古墳時代までは継続して利用されたことを示している。また表採遺物の中に中国明時代の青花を含んでいることは、相当の期間にわたって遺跡の利用があったことが認められる。しかし、遺構の上から同時代の遺構が検出されず、土地利用の変遷を知る上で貴重な事例であった。

中前後谷遺跡においては、旧石器時代からの遺跡利用が認められた。また範囲確認調査時に検出したトロトロ石器とした資料や、本調査時に確認した、全面がポジティブ面をもつ石核状の石器など風観岳支石墓群検出遺物と同様の石器が確認され、縄文時代晩期の突帯文期の所産と想定された。

第13表に風観岳支石墓群、高場遺跡と本遺跡の石鏃の形態別比較表を掲載しているが、「抉り方」で深く丸く抉りこむEタイプは、「かたち」で両側縁が外湾するものとの相関が高く、縄文時代でも古く位置づけられる。また、本遺跡からは14類と想定される石鏃が検出されており、記述のトロトロ石器とあわせて突帯文期の遺跡が近傍に存在する可能性が極めて高い。

風觀

	A	B	C	D	E	F	計	%
1	11	4	14	4	6	0	39	15.66
2	24	14	3	0	6	1	48	19.28
3	0	0	0	0	0	0	0	0
4	22	18	0	1	1	0	42	16.87
5	4	5	0	0	0	0	9	3.614
6	10	2	7	0	0	0	19	7.631
7	1	8	0	0	0	0	9	3.614
8	4	1	0	0	1	0	6	2.41
9	1	0	0	0	0	0	1	0.402
10	26	22	6	2	1	0	57	22.89
11	0	0	0	0	0	0	0	0
12	0	0	0	0	0	0	0	0
13	5	9	0	0	1	0	15	6.024
14	0	4	0	0	0	0	4	1.606
計	108	87	30	7	16	1	249	100
%	43.37	34.94	12.05	2.811	6.426	0.402	100	

高場

	A	B	C	D	E	F	計	%
1	4	7	4	0	9	0	24	19.35
2	2	3	9	4	28	4	50	40.32
3	0	0	1	0	0	0	1	0.806
4	2	0	0	0	1	0	3	2.419
5	0	0	0	0	0	0	0	0
6	5	4	5	0	16	0	30	24.19
7	1	0	0	0	4	0	5	4.032
8	0	0	0	1	0	0	1	0.806
9	2	0	0	0	2	0	4	3.226
10	2	1	0	2	0	0	5	4.032
11	1	0	0	0	0	0	1	0.806
12	0	0	0	0	0	0	0	0
13	0	0	0	0	0	0	0	0
14	0	0	0	0	0	0	0	0
計	19	15	19	7	60	4	124	100
%	15.32	12.1	15.32	5.645	48.39	3.226	100	

中前後谷

	A	B	C	D	E	F	不明	計	%
1		1			1			2	10.53
2	2	1		1	4			8	42.11
3		1						1	5.263
4			1					1	5.263
5			1					1	5.263
6								0	0
7								0	0
8	1							1	5.263
9								0	0
10							2	2	10.53
11		2						2	10.53
12								0	0
13								0	0
14							1	1	5.263
計	3	5	2	1	5	0	3	19	100
%	15.79	26.32	10.53	5.263	26.32	0	15.79	100	

第13表 風觀岳支石墓群、高場遺跡、中前後谷遺跡石鏃比較表